

に「この国を何とかしたい！」という思いから勉強熱心な人が多かった。発展途上国で、様々な問題を抱えている現状がさらにそう思われる要因ではないのかと思う。一方で、私たち日本人はとても恵まれており、私たち学生のうちのほとんどが特に不自由なくこれまで生活してきている。恵まれすぎている国で生きているからこそ、自分の国に対する関心が薄く、若者の選挙の投票率が低いこともその結果として現れているものの一つではないだろうか。今まで私は海外にもっと出たいし、海外のことをもっと学びたいと思っていたし、今もその気持ちは変わらないが、まず日本のことをもっと知ってから世界に出るべきだと強く感じた。毎日 SNS や YouTube ばかりを見ている中身の無い人間にはなりたくないと思った。もっと自分の国に関心を持ち、政治や経済をさらに勉強したいと思う。

そして、他にも印象深かったこととして、ウガンダでは国内の「差」がはっきりとわかることだ。例えば、首都のカンパラの都市部に住む人は電気や水道が整備された生活で、スマートフォンを持っている。しかし、国立公園の帰りに見た昔ながらの家に住む人たちはおそらく、電気や清潔な水を得ることができないだろうし、学校や病院といった施設へのアクセスも悪いと思う。さらに、北部の難民の方の生活は想像することすらできない。このように、ウガンダ国内のなかでもこんなにも顕著に格差を目にすることができた。一方で日本はどうだろうか？と考えたとき、わからないというのが正直な感想だ。ウガンダほどではないだろうが、日本も先進国なりに問題を抱えているはずだし、社会的に弱い立場になってしまっている人たちは少なからずいるはずである。でも、日本での「差」はあまり知られていないし、今まで私たちは知ろうともしてこなかった。この研修を通して私は、海外だけでなく、日本国内にもより広い視野を持つことができた。また、私は国際協力や起業といったことに興味があるが、今回の研修を通して実際にそれらがどのようなプロセスで行われているのかを知ることができた。例えば青年海外協力隊員として問題を解決するためのプロジェクトを何か考える際にも、一つの問題だけではなく周囲の環境などのさまざまな要因や背景を考慮しながら進めていくことが大切だと知った。また、私たちが訪問させていただいたクリニックマスターやエコスマートといったウガンダのベンチャー企業も、もともとはこの国にある問題を解決したいという思いから行われていた。だから、私が興味のある国際協力などに近い仕事に将来就けるようになるためにも、今後の生活では、多くのことに興味を持ち、国内外問わず世界で起こっていることに目を向け、正しい知識を持った大人になれるよう、様々な勉強に励み、多くの挑戦をしていきたいと思う。そして、この研修でお世話になった、家族、鳥取大学の先生方、マケレレ大学の先生方、TA さん、ウガンダでの訪問先の方々、この研修でともに過ごした仲間、全ての人への感謝の気持ちを忘れずに、今後も努力し続けていきたい。



最後まで読んでいただき、ありがとうございました。

〈参考文献〉

www.education.go.ug/

<https://oec.world/en/profile/country/uga/>

ウガンダ海外実践研修を通して気づいたこと、変わったこと

農学部生命環境農学科 1 年

西田 滯司



目次

1. はじめに
 - ・ウガンダに来る前と後のイメージの違い
2. 改善すべきこと
 - ・大気汚染
 - ・道路
 - ・地域格差
 - ・ゴミ問題
 - ・農村部の課題
3. プレゼンテーションの内容
4. この研修を通して変わったこと
5. これから取り組んでいきたいこと
6. 最後に

1. はじめにーウガンダに来る前と後のイメージの違い

私は2月27日から3月20日までの23日間、ウガンダのカンバラを中心に様々なことを実際に見て、体験し、学んだ。私は元々アフリカの貧困問題に興味があり、どのような理由で貧困は起こり、どうしたら解決することができるのかを本やインターネットなどで調べ考えていた。調べていく中で、実際に自分の目で見てみたいという思いが強くなり、このプログラムに申し込んだ。頭の中では、都市部は発展していて、貧困はあるが皆がそうではないことは分かっていた。しかし心のどこかに、貧困で悲しい、雰囲気が暗いなどの負のイメージが強かった。実際に行ってみると、確かに貧困やインフラの不整備、大気汚染など課題はたくさんあったが、私が出会ったウガンダの人は優しく、明るく、フレンドリーで心の中に希望があり、「成長するぞ」というモチベーションが高い人が多かった。Subsistenceの農家さんのもとへ行った時、そして国立公園に行く時に、たくさんの貧しい人々を見た。その暮らしは電気もなく、水道もなく、家も土と藁でできた物、服も汚れていてとても貧しそうに見えた。しかし、そこにいる子ども達は走って笑顔で手を振ってきた。その笑顔を見て、確かに貧しいがそこには悲しい雰囲気などなく、日々成

長するために生きているんだなと感ずることができた。自分の貧困のイメージというものが変わり、この人たちと一緒に今の課題を一つずつ解決したいと思うようになった。

ウガンダに来て驚いたことは、果物がおいしいということ。特にバナナとパイナップルだ。こんなに甘いものは食べたことがなかった。もう一つは自然が多いということだ。ウガンダには国立公園が7つもあり、私たちはその一つである Murchison Falls National Park を訪れた。そこには滝、川、広大な草原、動物がいた。国立公園以外にも都市から離れると、すぐに湿原、草原、林など緑が多かった。私のイメージではもっと自然が少なく、土壌は劣化しているイメージだった。

2. 改善すべきこと

・大気汚染

私がウガンダのカンパラに来て最初に思ったことは大気汚染がものすごいということだ。車、ボダボダ(バイクタクシー)にあふれ、またそれが古い型のため、排気ガスを多く排出している。吸っていると頭が痛くなり、息苦しくなるほどである。蚊よけのフィルターも黒ずんでいた。大気汚染は呼吸器疾患やがんなどの健康被害を引き起こす。近頃人口増加も進んでいる中で、いかにして大気汚染を無くしていくかが課題である。その解決方法の一つの方法として、バスなどの公共機関を導入することによって車、ボダボダの台数を減らすという意見がでた。多く人を一つの乗り物に乗せることができ、交通渋滞も同時に解消することができる。しかし、これをやりすぎると、ボダボダやタクシーで生計を立てている人々の収入を減らすことになってしまうため、導入の程度をよく考えなくてはならない。

・道路

Subsistence の農家さんのもとに訪れた時、土がむき出しで、でこぼこがたくさんある道路を通って行った。途中でミレットを運んでいるトラックとすれ違った。トラックは前後上下に揺れ、スピードはゆっくりで、積んでいるものが落ちてしまうのではないかと思った。道路が舗装されていないと、農家さんが穀物、果物などを作り輸送するときに、余計に時間がかかり、コストもかかってしまう。農業に従事している人の割合が多いウガンダでは、大きな問題であると考えた。カンパラ近辺では JICA などが高速道路を建設するプロジェクトがあったりと、コンクリートの道路が多かったが、田舎の方ではまだ土のままのものが多かった。今ではないが、将来の解決策として自分たちで道路を整備できないか考えたが、道路の整備は政府の仕事のためできないのだという。政府もこの問題は分かっているだろうが、金銭的に難しいのだと考える。



写真1 未舗装の道路

・地域格差

私たちは今回のプロジェクトでウガンダの中心、西側、東側、北側に行った。カンパラ(中心地)はビルや大きい家、ホテルなどが建っておりとても発展していた。そこで暮らしている人も服が綺麗だったり、少しふくよかな人が多かった。しかし中心から離れるにつれて、痩せている人や服がボロボロな人が多くなっていった。一目で分かる地域格差に驚きを隠せなかった。日本では確かに田舎と都会で住み方や所得は多少違っているが、ウガンダほどの格差は感じられなかった。都市と田舎の格差だけでなく、都市の中での格差、田舎の中での格差も感じた。都市での格差を感じられたのは、私たちが宿泊していたホテルの前にあったスラムを見た時である。そのスラムでは周りとは違う雰囲気を醸し出して、ゴミが多



写真2 Subsistence の家

く、家も汚く、街灯も少なかった。ある日、ホテルに帰るバスの中から、ゴミ捨て場から売れるものを探している人々を見た。ウガンダに来て、高速道路やバナナ、茶農園、ビルなど発展しているものを見て、以前までアフリカ＝貧困みたいなイメージが消えた後だったため、ウガンダの全員の所得が低いわけではないが、やはり貧困問題は実際に起こっていると体感することができ、少し心が痛かった。田舎の中の格差を感じた時は、subsistence の農家さんを訪れた日のことだ。私が訪れた農家さんは比較的裕福な農家さんだった。家畜や道具、肥料を買うお金を持っていて、ササカワアフリカ財団にも支援してもらって、主に換金作物であるお米を育てている。その農家さんを訪れる前にバスでたくさんの subsistence の家を見た。家は博物館で見たような土と藁でできているもので、服装もボロボロ、子供もおなかがポッコリとしていて、もしかしたら、教科書でみた飢餓が理由でなるものだったかもしれない。一緒に行っていた TA さんが貧困な農家さんは、家畜を得ることができず、耕耘を人の手だけでやる必要があったり、堆肥を手に入れることができないと言っていた。また、圃場を適切に管理する知識、技術を持っていなかったりするため、生産性も低く、肥料もないから年々質が悪くなっていく。青年海外協力隊で働いている人にお話を聞いたとき、支援の対象は subsistence だが、支援したいけどできない農家さんもおっしゃっていた。田舎の中でも、知識、技術、道具、支援、土地の広さなどによって、所得に違いができ、格差ができていると感じた。私はこのような支援も受けられないような農家さんを将来サポートできたらいいなと考えている。

・ゴミ問題

ウガンダにはありとあらゆるところにゴミがあった。マケレレ大学の中、川の側、町の中など。それは異臭を発して、とても衛生的にいいものではなかった。TA さんにゴミの処理についてお話を聞いたところ、田舎の方は自分たちが出したごみは、穴を掘り、その中に入れて焼却するのだという。しかし最近その方法だと CO₂ など地球温暖化ガスを多く排出してしまうため問題になっているのだという。都市部は定期的にゴミ収集車が来て、ゴミを回収し、どこかに持って行き全部焼いてしまうのだという。ペットボトルはリサイクルしているようである。都市にゴミを回収に来てるとはいえ、都市にはゴミが多くあったため、そのシステムは日本ほど上手く作動していないと考えられる。EcoSmart というサトウキビの残渣で女性の生理用ナプキンを作っている企業を訪ねた際、近くにあったペットボトルのリサイクル企業について質問した。その企業では工場の近くに住んでいるストリートチルドレンにペットボトルを運んでもらい、お金を支払い、砕いて、それを中国に輸出しているという。貧困者にお金を与えることができ、またゴミも減らすことができるため、とても良いと考える。今は中国に持って行きリサイクルしているが、ウガンダでもできるようにすれば、輸送コスト、排出ガスが抑えられるため、ウガンダにそのような工場ができればよいと思う。また、このゴミ問題は、人のゴミについての考え方を考慮しなければならぬと考える。なぜならば、TA さんと棒付きのアメをホテルで食べた時に、TA さんは食べ終わった後、付いていた棒をホテルの床に投げ捨てていた。比較的日本の文化を知っている TA さんであってもそのような行動をするということは、ウガンダ人はゴミをゴミ箱の中に入れる習慣というものがあまりないのではないのかと思った。ゴミ問題の解決策として、ゴミ箱を置いて、ゴミ分別してもらおうという意見が出たが、ゴミ分別をする前に、ゴミはゴミ箱に捨てるということを、ゴミ箱に捨てなくてはならない理由を添えて知ってもらわなくてはならないと感じた。

・農村部での課題

はじめにウガンダは約 80% の人々が農業に従事しており、その 60% が subsistence である。残りは commercial と domestic である。その人達は 1 日平均して \$ 1.9 で生活している。そして農村部では subsistence が多い。つまり農村部では貧困が多いということだ。ではこの貧困が起る要因を農村部に焦点を当てて考えていく。

・農民の農業知識が乏しい

農村部での問題は、まず農民の農業知識が乏しいことが挙げられる。バスに乗っていると街道

沿いに農家さんの庭、畑を見ることができる。それを見ると、作物や果物がまばらに植えられていることが分かる。まばらに植えていると収穫しづらい、水の管理や作物、果実の手入れがしづらい、栄養の偏りがある、一家庭当たりの圃場が小さいので収穫量が減ってしまう。私はウガンダに来る前は、肥料のあげ方が適切ではないとか、灌漑などの機械を買うことができないなどというイメージだったが、実際はそれ以前の「きちんとまっすぐ植える」という基本的なことができていない状況であった。その原因となっているのが、教育を受けることができていないということ、教える人が少ないこと、気候が温暖で、土壌も肥沃なため植えればある程度は育つ環境であるということ、などが挙げられると思う。プログラム中で secondary school を訪れたが、その果樹園は日本のようなものではなく、林みたいな雑草なども生い茂っているものだった。学校は一校しか訪れていないため、ウガンダの学校でどのようなことが教えられているかまでは知ることはできなかったが、同じような環境であると予想できる。このような環境では今のウガンダの農業は変わっていかないのではないかと考える。

- ・搾取

Subsistence の農家さんは自分のトラックを持っていないため、自分で市場やスーパー、ホテルなどに品物を送ることができない。そのため輸送業者などに頼ることとなる。搾取の問題となるのがミドルマン（仲買人）という人たちだ。この人たちは田舎の subsistence の農家さんのもとへトラックを向かわせ、安い値段で作物や果物を買う。そして、市場などに持って行き高い値段で売る。農家さんは本来であればもっと収入を得られていたはずなのに、得られなくなってしまう。

- ・安定した買い取り場がない

日本には集荷業者や卸売市場があり、自分で作ったものを売ってくれるシステムがある。しかしウガンダでは、人脈がある人は特定のスーパーやホテルなどに売ることができ、その他の人はローカルマーケットというフリーマーケットみたくところに品物を置く。しかしそこは、日によって売れるかどうか分らず、収入も安定しないと考える。ウガンダに、農家さんにとって安定した買い取り場があれば安定した収入を得ることができ、子供の教育費や肥料、道具などを買う資金になると思う。

3. プレゼンテーションの内容

私は、農業分野による貧困問題解決をテーマに最終プレゼンテーションをした。私がなぜ貧困問題に焦点を当てたかという、まず中学生の時からアフリカの貧困問題に興味があったからである。私が中学3年生の時に公民の授業で貧困問題について習った時、教科書には乾いた土に今にでも餓死してしまいそうな子供と、その後ろにハゲワシが立っている写真が載せられていた。私はこの写真を見た時に、同じ世界にこのような状況が起っているのかととても驚いた。その時から、どうしたら貧困問題を解決することができるのかを考えるようになった。なぜ農業を選んだかという、ウガンダ人の多くが農業に従事しており、その多くが少ない収入で生活をしている。もし、ウガンダの農業を活性化させることができれば、多くの人の所得を上げることができ、貧困解決の一つの手段になりえると考えたからだ。

私のアイデアは食品加工の会社を立ち上げるというものである。まず最初に、周辺の複数の subsistence の農家さんから成るコミュニティを作る。そのコミュニティから一人リーダーを出してもらい、さらに他にも同じようにコミュニティとリーダーを作る。そして各コミュニティをまとめるもう一つの大きなコミュニティを作る。そこでは月一回各リーダーと私や職員が集まり、自分たちの畑では何が必要か？ どうやって作物や果物を育てているか？ 何か各コミュニティで成功した場合、どうして成功することができたのかをシェアしてもらい、私たちの会社からは、各農家さんのもとへ訪れて農業の知識（土地の適切な管理方法、栽培方法など）、道具、適切な種を与える。しかし、道具と種は農家さんが払える額でローンを組んで買ってもらうと考えている。わざわざローンを組む訳は自分で買ったものという意識をもってもらいたいからである。自分で買ったものであれば、大切に使うてもらえると思う。また、農業に対するやる気に

もつながるのではないかと考える。さらに、私の職員が各コミュニティに向かい、農家さんが生産したバナナとパイナップルを会社の工場に運んでもらう。会社ではウガンダの人を雇い、バナナはジュース、チップス、ドライフルーツ、ケーキなどに加工、パイナップルはジャム、ドライフルーツなどに加工する。工場加工したものはウガンダで販売、また保存が効くものは日本や隣国に輸出する。

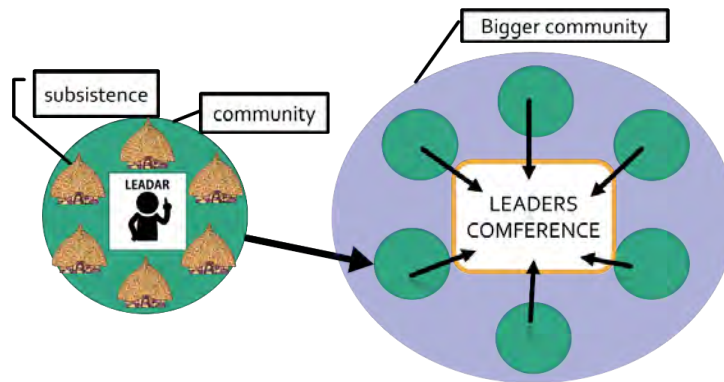


図1 コミュニティー

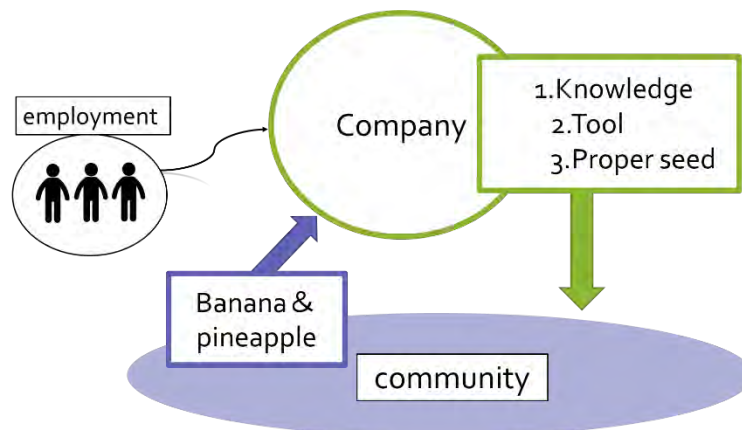


図2 会社と農家さんのやりとり

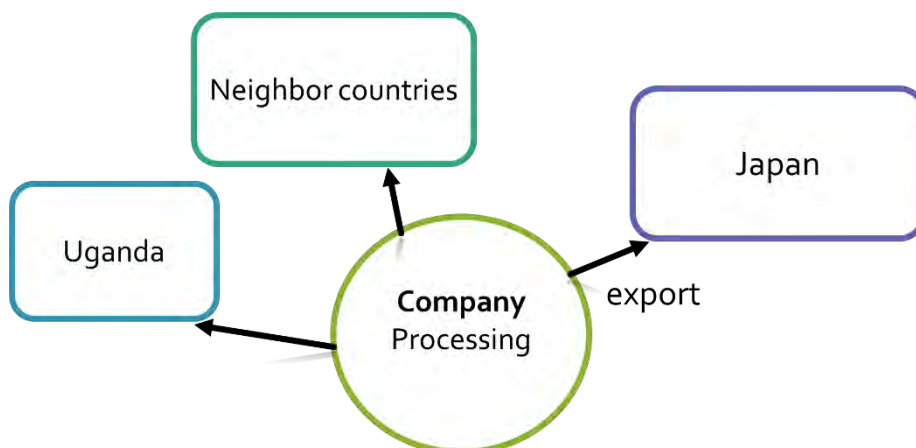


図3 出荷先

<なぜ企業なのか？>

今回のプロジェクトでは、JICA、笹川アフリカ財団といった非営利組織、またヤマセン(日本料理屋、自分たちが使う野菜を自分の圃場で育て、そこでは野菜を市場で売ったり、ウガンダ人を教育したりしている)などといった営利組織のところを訪れた。二つのやり方を見てみて、JICAなどの活動もとても重要だが、ただ与えるだけでは終わらない、企業の方が農家さんと対等な目線に立ちやすいと思った。また、企業となると困難なことがたくさんあると思うが、日々成長している感じを味わえることができ、充実するのではないかと考えた。

<この会社を作ることによるメリット>

Subsistence の農家さん達で構成しているコミュニティー、そしてリーダーを作ることにより、農家さんの状況やこちらの意見の伝達など管理がしやすくなる。また、リーダーはそのコミュニティーを引っ張っていき、頼られる人になるためモチベーションの向上に繋がっていくと考える。また、職員が各農家さんの所に訪れ、技術指導、道具や種の提供をすることにより、農家さんの生産性向上につながる。もし、私の企業が成長することができたら、農家さんから買えるものの量が増え、収入の増加に貢献することができる。

<会社の場所>

海外への輸出も考えた案であるため、比較的エンテベ国際空港に近いウガンダ中心部への立地を考えた。また、近年ケニアとウガンダの道路整備が進んでいるため、中心部であればトラックでケニアの港まで運んで、船で輸出もできる。本来は列車で輸送したいが、ウガンダはまだ列車の整備が整っていないため、今回の案では考えていない。

<なぜバナナ、パイナップルなのか？>

私がバナナを選んだ理由は、会社を立てようと考えているウガンダ中心部と、西部ではバナナを主に作っているため、手に入れやすいからだ。パイナップルを選んだ理由は、ウガンダに着いてホテルの朝食でパイナップルを食べた時に、日本のものに比べてとても甘く、芯まで食べることができることに驚き、これは日本で売ったら売れるんじゃないか？と思ったからである。また、パイナップルも中心部と西部で育てられているため手に入れやすいからである。

4. この研修を通して変わったこと

私は基本的には授業に積極的に参加していたが、何か質問は？と問われるとなかなか答えられないでいた。それは、授業や講義の内容をそのまま受け入れていたからだと思う。つまり聞いたことにつっこみを入れていないということだ。ウガンダに行く以前も自分なりに一生懸命講義を受けていたつもりであったが、いまいち身についているという感覚が少なかった。しかしウガンダでの授業では TA さんの向上心に刺激を受け、一つ一つにつっこみを入れるようにした。そうすると、全体の内容がより頭に入りやすくなり、質問がしやすくなった。また、一回頑張って質問すると、皆の前でも質問することが恥ずかしくなくなっていく。日本の講義でもツッコみをいれて、充実したものにしていきたいと思う。

研修前は、私がやりたいこととはアフリカの貧困問題解決で、その方法は農業分野からのアプローチとざっくりとした考えしかなかった。しかし、ここに来て色々な人の話を聞き、見て、今のウガンダには何が必要なのか？自分がやりたいことは何なのか？をじっくりと考えることができ、考えを整理することができた。これからも、考え続けていきたいと思う。

5. これから取り組んでいきたいこと

今回の研修に参加して、自分の英語力の低さと農業知識の少なさ、技術力の無さを痛感した。日常英語程度であれば、ある程度会話を予想出来たり、聞き取れたりして会話できたが、予想できないものだったり、知らないこと(講義)は聞き取れないことが多かった。また、自分が言いた

いことも上手く英語に出来なかつたりしたことがあった。このことが分かったことも成果だと思う。これからは、スピーキングとリスニング力をつけたいと思う。TOEIC や TOEFL の勉強やラジオ英会話、音楽、映画などを通して英語を楽しく学んでいきたいと思う。また、農家さんの圃場を見た時に、私の友達はこの圃場のよくないところが分かったり、肥料や育苗や管理の方法など農業知識が豊富で、色々なことに気づいていた。しかし、私は農業についての知識がほとんどなかった。農業分野で貧困問題を解決したいと言っているが、自分に知識がないため、口先だけとなっているみたいでとても恥ずかしかった。だから、日本に帰ってから、またはウガンダにまた戻ってきて農業の知識、技術を身に着けたいと思う。具体的には図書館での机での勉強と大学外で農業をしている知り合いがいるので、実際に畑で野菜や果実を育ててみたいと思う。また、夏には専業農家さんのもとのインターンも考えている。そこでは農業の知識、技術の習得はもちろんのこと、経営のところも注目して学びたいと思う。

6. 最後に

このプログラムに関わって下さったすべての皆様、ありがとうございました。今回、充実したプログラムができたのは皆様のおかげです。日本でサポートして下さった国際交流課の方々、ウガンダで私たちを受け入れて下さった企業や国際協力機関や大使館の方々、現地でいつも助けて下さった TA さん、教授、安藤先生、蕪木先生に感謝しています。また、このプログラムのメンバーはいつも明るく、優しく、少しきついことがあっても乗り越えることが出来ました。そしてメンバー一人一人、物の捉え方が違って、そういう考えがあるのか、といつも刺激を受けていました。

本当にありがとうございました。



最後まで見ていただきありがとうございました。

ウガンダ海外実践教育プログラムをとおして

医学部保健学科看護学専攻1年
足立 理子



目次

1. ウガンダ海外実践教育プログラムに参加したきっかけ
2. ウガンダを訪れて感じたこと
3. マケレレ大学での授業をとおして
4. ウガンダの医療事情について
5. プレゼンテーションについて
6. プログラムに参加して得たもの・考えたこと
7. 最後に

1. ウガンダ海外実践教育プログラムに参加したきっかけ

まず、私がこのプログラムに参加したきっかけは友達にウガンダに行こうと誘われたことだ。はじめウガンダと聞いた時はどこの国だろうと思ったが、ウガンダや研修内容を調べていくうちに私も行ってみたいという気持ちが高まっていった。また、単純にアフリカがどんなところなのか興味があったのと、この機会を逃すとアフリカに行くことはないだろうと思ったからだ。

2. ウガンダを訪れて感じたこと

私がウガンダを訪れる前に持っていたイメージは赤土むき出しの道や乾燥した土地といったものだった。しかし実際に訪れてみると緑豊かで自然あふれる土地で、道路は舗装されていたり近代的な建物がたっていたりと、イメージと異なる風景が広がっていた。また、TAさんなどとの交流を通してウガンダの人々のフレンドリーさや親切で親しみやすい人柄に魅力を感じた。このようなポジティブな印象の反対に、地域格差や経済格差といったネガティブな部分を目にすることもあった。例えば、ムバララや国立公園への移動中農村部を通った時に、水を運ぶ人の姿や昔ながらの木と藁のようなものでつくられている家を見かけた。私はウガンダミュージアムを訪ねた

ときに、下の写真右にあるような家を見ていて昔はこんな家だったのかと思っていたが、実際に住んでいる人もいることを知って驚いた。また、主要な道を外れると舗装されていない赤土むき出しの道が多く見られた。このように都市部と農村部の間では生活が全く異なっており、インフラの整備がまだ行き届いていないことを知った。そのほかに、ウガンダは大気汚染が世界でも上位であることを初めて知り衝撃だった。このように実際にウガンダを訪れることで、調べるだけでは知ることができない最新のウガンダの現状を、自分の目で見て知ることができた。



3. マケレレ大学での授業をとおして

私がマケレレ大学で受けた授業で印象に残ったことは2つある。1つめは、ウガンダは農業大国であり、人口の60%が農業に従事しているということだ。農業には3つ種類があり輸出を目指す商業的なものと家庭的なもの、そして商業的なものと家庭的な農業を合わせたものがあると学んだ。ウガンダでは自給自足が一般的なため、作物の販売先は主に隣国の南スーダンといった外国である。問題点として、農業のスキルが普及していないため生産性が低いなどが挙げられることを学んだ。私はウガンダの人口の60%が農業に従事していることを知り、農業事情を改善することの重要性を改めて感じた。

2つめに印象に残ったことはGDPの低さだ。ウガンダの1カ月当たりのGDPは47\$で、日本の1カ月当たりのGDPと比較すると約68倍もの差がある。農業がGDPの24%、産業が25%、サービスが51%を占めていることが分かった。また、輸入をするうえで内陸国であることはコストがかかるため不利となる。そのため、輸入コストを下げるために経路である鉄道整備を進めていく必要があることを学んだ。

4. ウガンダの医療事情について

私は日本と比べてウガンダの医療事情はどのように異なっているかなどについて興味があった。まずクリニックマスターは患者の情報を電子化し管理するソフトをつくっており、今回はソフトを導入している病院を訪問した。ソフトを導入するメリットとしては、診察を効率的に行えるようになり、患者の待ち時間やカルテの紛失が減ったことなどが挙げられる。またデメリットとしては、電力が落ちてしまうと機能しなくなってしまうことや、ソフトの使い方をスタッフに教えるのにコストや時間がかかることが挙げられるそうだ。そのため、会社としては中央サーバーを設けることでより多くの病院にソフトを提供でき、さらにそこで管理することで各病院に管理人を配置したりスタッフに教育したりするコストを節約できると考えている。しかし資金が十分になく実現できていないのが今の現状である。私は、クリニックマスターを導入している病院を訪問してみて想像していたよりも環境が整備されていたことに驚いた。また患者さんのことを考えて病院内の様々な職種の人たちが協力していることを知り、ホスピタリティが素晴らしいと感じた。ソフトを導入したことで以前より半数以上多くの患者を診察できるようになったと知り、電子化することの効果をより実感した。しかしウガンダの病院で電子カルテを使用しているのは20%程度であると聞き、どのようにコストを節約しながら広めていくのが課題だと学んだ。

ムバララ病院では1日に約50人赤ちゃんが生まれるそうだが、ムバララ病院の産婦人科にはベッド数が40床しかなく、多くの赤ちゃんや母親は推奨される入院期間より早く退院しなければい

けないため、十分なケアを受けられず退院せざるをえないことが多い。さらに病院では妊婦検診を行っているが、8回しなければいけない検診をすべて受けられる妊婦は少ないようだ。理由としては、まず病院まで行くのに困難であったり、家庭の仕事で手一杯になってしまったりしていることが挙げられる。検診を受けないことで異変に気付くのが遅くなったり、知識や情報の不足でどういう時が危険な状況なのかわからなかったりして、赤ちゃんや母親の命を危険にさらしてしまう。このように妊婦さんたちが検診を受けたくてもなかなか受けられない状態にあることを知った。



Photo by Rajab Mukombozi



5. プレゼンテーションについて

このことから、私はアフリカやウガンダの医療事情の中の、特にマタニティケアについて興味がうまれたため、私はそれについてのプレゼンを行った。サブサハラ・アフリカでは毎年116万人の赤ちゃんが死亡しており、調べていく中で多くの赤ちゃんが感染症で死亡していることが分かった。感染症とは体の中の細菌が原因で起きる病気のことである。赤ちゃんの病気の76.3%が感染症であり、最も多いのがマラリア、次に風邪、そしてHIVといわれている。感染症が蔓延する理由として手洗い、手指消毒の習慣がついていない、病院のベッド数やスペースが不足していて患者同士の距離が近く衛生環境が悪いこと、感染症の知識や情報の不足といったことが挙げられる。また、手を洗う石鹸や手指消毒用のアルコールが高価で簡単に手に入らないといったことも問題である。ムバララ病院には、写真のように廊下の壁などにアルコールが置いてあるところをよく見かけた。しかしムバララ病院で働かされている協力隊の方によると、このような医療物資には限りがあり、使い切ってしまうと次の在庫の入荷を政府に頼まなければならないと頼んでも物資が届くまでに時間がかかるそうだ。

これらを改善するために私は石鹸やアルコールといった医療物資がより手に入りやすくなるように供給システムを整備することが必要だと考えた。また、病院のベッド数やスペースを確保していかなければいけないが、病院側に十分な資金がないため、政府に現状の劣悪さに気づいてもらい、援助を受けなければ改善は難しいと感じた。そのほかにも下の写真にあるような咳エチケットや、正しい手の洗い方など、簡単にできる感染予防対策を広めていくことも重要だと考えた。





6. このプログラムに参加して得たもの・考えたこと

このプログラムに参加して毎日さまざまな経験をする事ができとても充実した日々を過ごせた。ウガンダで異文化に触れる生活をとおして、日本や自分をより客観的に見る視点を得られた。例えば、日本の生活がどれほど恵まれているのか、自分の知識や勉強に対する意識の低さなど、日本で同じ環境には気づかなかったであろう多くのことに気づくことができた。研修中お世話になったTAさんたちは、自分の国の歴史や経済、産業など自分の専門ではない分野だとしても詳しい知識を持っていて、私たちにわかりやすく教えてくれた。しかし、私はTAさんに日本の政治はどんな仕組みなのか、と聞かれた時ほとんど何も答えることができず、自分が何も知らないことを自覚した。また、この3週間で以前より度胸がついたと思う。この研修中、ケネディセカンダリースクールで大勢の前で自己紹介をしたり英語でプレゼンテーションをしたりと、人前で話す機会が多くあった。どちらも私にとっては初めての体験で、正直どちらもしたくなかった。しかし、実際にしてみると緊張はしていたがひどい結果にもならず、案外何とかなるのだなと思い、その精神で何かをするときに不安に思うことが少なくなった。私は人前で話すことが苦手だったが、これらの経験をとおしてあまり恐いと思わなくなった。プレゼンテーションでは、TAさんに1番大切なことは相手に伝えるということに聞き手を大事に、というアドバイスをもらいはっとさせられた。

また、前述したケネディセカンダリースクールではウガンダの子どもたちとたくさん交流することができた。民族衣装のファッションショーや歌、ダンスなどの出し物がありとても楽しかった。セレモニーで生徒と話したとき、日本でどんなことを勉強しているのか、普段どんなものを食べているのか、首相は誰なのか、などたくさん熱心に質問され圧倒された。自分の興味のあることや疑問に思ったことを他人に素直に聞いてすごいなと思った。日本の中学校では、質問すると目立つからしないというような空気だったイメージがあるため、ウガンダの積極的で自分の興味に素直になれる環境がとてもいいなと感じた。横の写真はクイズをしている時のもので、たくさんの生徒が参加してくれた。



ウガンダに来たとき、英語が聞き取れなかったり言いたいことが表現できなかったりとコミュニケーションがとれずもっと英語力、語彙力があつたらなと思うことがたくさんあった。伝えたいのに伝えられなくて悔しかったが、その分言いたいことが伝えられたときはとてもうれしかった。英語でコミュニケーションをとる生活をしていくうちに、英語に対する恐怖心がなくなったことが大きな変化だと思う。しかし、自分の英語があっているのか気にしてしまっていたため、もっととらわれずに話せるようになりたいと思った。日本では英語を話す機会が大学の授業のときくらいしかないので、英語を話す機会を見つけて増やしていきたいと思っている。



ウガンダで過ごした3週間は1日1日が濃厚で、毎日力を使いきり今日も生ききったなと思うくらい充実していた。きっとこのプログラムに参加していなかったら、だらだらと遅く起きてスマホを見て1日が終わる、というような春休みを過ごしていたに違いない。そうなることなくこのプログラムに参加できてよかった。はじめはTAさんの話す英語が聞き取れず、コミュニケーションがとれなかったり、新しい環境に対する不安であったりで日本に帰りたいと思うことがあったが、だんだんとウガンダのエネルギーでパワーにあふれた雰囲気が好きになり、研修が終わる頃にはウガンダにもう少し滞在したいと思うようになった。日本に帰国し、家族や友達にまたウガンダに行きたいと私が言うと、みんな驚いた顔をしていた。きっとウガンダに対するイメージが、はじめに私が持っていたものと同じようなものだからだろう。しかし、見たもの経験したことを紹介すると、いい国だねと言ってくれてうれしかった。私はウガンダのような魅力的な国を知らないのはもったいないと思うし知ってもらいたいので、もっといろいろな人に魅力を伝えていこうと思っている。

また、このプログラムに参加したことで新しい知識を得られた他に、自分の内面や将来について考える機会が多くあった。まだまだ未熟な自分を何度も自覚し落ち込むこともあったが、その時間が自分自身の成長につながったと感じる。また、たくさんの刺激をもらえる仲間やTAさんに出会うことができとてもよかったと思う。同世代で将来のビジョンをしっかりとっていて、それを実現させるために何が必要かを考え実行している姿をみて、自分ももっと将来について真剣に考えようと思うきっかけになった。

今回、医療や農業に携わっている青年海外協力隊の方のお話を聞かせていただいて、海外で働くことや国際協力により興味が生まれ、ウガンダなどの発展途上国の助けになりたいと思った。現在大学で看護学を学んでいるため、将来看護師になり医療が不足しているウガンダなどの国の役に立ちたいという目標ができた。そのためにも、まず日本で医療技術をしっかりと身に付け、いつかまたウガンダに戻ってこられるよう頑張りたい。

7. 最後に

私は海外に行くのは今回が初めてで何もかもが未知であったが、ウガンダに行くことができ本当に良かったと思う。最近では海外の情報もネットで知ることができるが、実際に自分の目で見て感じるのでは印象も記憶の残り方もまったく違うのだと、改めて感じた。そしてもっと日本以外の国を自分の目で見てみたいと思うようになった。今は難しいかもしれないが、もしまた海外に行く機会があったら是非行きたいと思っている。

多くの方たちの協力でこのような充実した一生の宝物になる経験ができた。私たちを快く受け入れてくださったJICAの方々、TAさん、そのほかの施設の方々、そして私たちの引率をしてくださった先生方に感謝の気持ちでいっぱいだ。また、コロナの流行で大変な時期であったにもかかわらず無事に予定どおり研修を終えられたことに感謝したい。そしてこの研修で得たものを糧にしてこれからの生活や学びに活かしていきたい。

ウガンダ海外実践教育プログラムを通して

地域学部地域学科国際地域文化コース 2年

中津 春



目次

1. はじめに
2. ウガンダ海外実践教育プログラムに参加しようと思ったきっかけ
3. ウガンダへ行く前と行った後のウガンダに対するイメージ
4. マケレレ大学で行ったプレゼンテーションについて
5. プレゼンテーションを通して
6. ウガンダに行って学んだもの・得たもの
7. 自分の課題・次へのステップ
8. 最後に

1. はじめに

私は2020年2月28日から3月19日の期間で行われたウガンダ海外実践教育プログラムに参加した。本プログラムでは、マケレレ大学での講義やJICAの活動見学、病院訪問、現地学校訪問など、たくさんの活動を行った。またこれらの活動にはマケレレ大学の在学生及び卒業生6人がTAとして参加し、私たちの活動を補助してくれた。これらの活動を通して、私が感じたウガンダ、その中で特に印象に残った事柄についてのプレゼン発表の内容、ウガンダでの気づき、学び、経験を通して求められる力などについて述べていく。

2. ウガンダ海外実践教育プログラムに参加しようと思ったきっかけ

まず、私がこのプログラムに参加しようと思った理由から述べていきたい。動機はアフリカという国に興味があった、自分一人では簡単に行ける国ではないからという単純なものだった。私の所属学部が地域学部の国際地域文化コースということもあり、様々な国の特性を学ぶことが多

かった。宗教や文化、生活様式などを学ぶ講義が多くあり、外国についての興味関心が深まっていった。多くの国について学んでいく中で、日本やアジアの文化とはかけ離れたアフリカについて、興味が湧いた。ウガンダでの研修前にアフリカ地域や文化についての講義を受講していたので、多少はアフリカの文化を学んだがやはり、アフリカ国というのは未知の世界というイメージだった。そのため、ウガンダでの海外研修に参加し、アフリカという国がどのような国であるのかを自分の目で見たいと思い、参加することを決めた。

3. ウガンダへ行く前と行った後のウガンダに対するイメージ

ウガンダでの海外研修に参加することが決まり、私はウガンダという国を調べることから始めた。正直、ウガンダというよりもアフリカ国に行けるということしか頭になく、ウガンダがどのような国であるのかをきちんと把握していなかった。そのため、海外研修が決まってから、ウガンダについて調べると自分の想像以上のものがネットに出てきた。ゴミの山や整備されていない道路、大量のボダボダ、見たこともない虫の数々といった写真が多くネットに載っていて驚愕した。それと共に不安に駆られた。アフリカというと衛生面が悪いというイメージだったが、実際にネットで調べてみるとそのような記事が多く掲載されていたため、自分にそのような環境の中で適応できるのか少し心配だった。また、発展途上国ということもあり、日本で当たり前のようにしてきたことが出来ないことや通用しないことも多くあるだろうと覚悟していた。渡航前の事前研修でも、自分が事前に回避できることや注意しなければならないことを学び、準備は十分に行った。

その後、ウガンダへ着くと、私のイメージは間違っていなかったことが分かった。道端にはたくさんゴミが落ちている、木の周りに落ちているバナナの皮に群がる大量のハエ、交通整備が為されておらず、交通マナーの悪い大量のボダボダが横の車に接触しながらも平然と走っていき、道路の脇で昼寝をしている人など、日本では見ることもない情景を一日で多く目の当たりにした。大抵の国は行ってみると想像と違った、実際はこうなんだと感ずることが多いと思うが、ウガンダはイメージ通りの国だった。イメージ通りすぎた環境に、他の部分ではどうなんだろうとますます興味が湧いた初日だった。

4. マケレレ大学で行ったプレゼンテーションについて

初日に見たこれらの衝撃的な環境の中で特にインパクトが強かったのが、やはり衛生面の悪さであった。日本でもしばしば道端にゴミが落ちていることはあるが、ウガンダは桁が違った。ゴミが落ちているというよりは捨てに来ているんじゃないかと思うくらいに溝にゴミが溜まり、木の周りには袋に入れられずにそのまま散乱したゴミが密集していた。しかし、地元の人々はこれが当たり前であるかのように、気にすることもなく歩き、ましてやその近くでモノや食べ物を売っていた。私はこの光景に驚き、また興味を持った。そのため、ウガンダでのプレゼン内容はウガンダの衛生事情にすることに決めた。ウガンダの衛生事情について調べてみると、日本とは異なる点が多くあった。ウガンダでは衛生面の悪さによって引き起こされる病気が多くあり、特に小さい子供たちは衛生面の悪さから病気にかかるケースが多く、最悪の場合、死に至るケースも少なくない。このようなことから、どのような点が衛生面の悪さを引き起こしているのか、いくつかの身近な原因とその解決方法の提案について、プレゼン作成を行った。



まず一つ目が排水管の整備が整っていないことが分かった。(写真下) 場所によっては排水管が地面にむき出しになっており、その排水管から漏れた下水道が悪臭を放つ原因となっている。ウガンダに来てから、私はこの悪臭によく悩まされた。バスでの移動中、暑くてよく窓を開けてい

たのだが、どこからともなく悪臭がバスの中に蔓延し、みんなで悶えていた。すぐに窓を閉めても消えない強いにおいはずっと鼻に残り、私たちを苦しめた。腐った生ゴミと便のようなにおいが混ざった悪臭は、日本にいと経験することは出来なかつたろう。この悪臭の原因の一つが排水菅の整備が整っていないことから引き起こされることが分かつた。



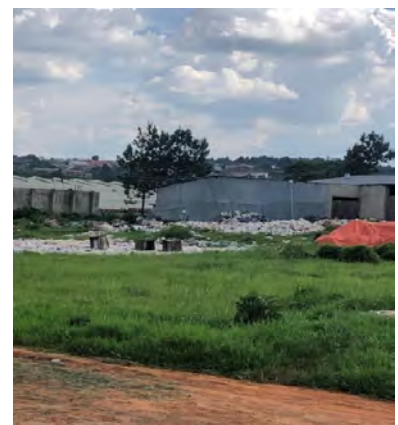
二つ目に、ゴミの廃棄処理が適切に行われていないことが衛生面の悪さに挙げられる。スラム地区によっては、家にトイレが備わっていないことがしばしばあり、そのため排便をポリ袋にして、それをそのまま溝に捨てていくという話を一部の現地の人から聞いた。その話は確かではないが、他の人の話では一昔前にはあつたという話もある。私は実際にそのような光景を見たわけではないが、溝にたくさんゴミやポリ袋が捨てられているのは目撃した。溝の水は黒く濁り、ひどい異臭を放つていた。これらから、人々が適切にゴミの廃棄処理を行っていないことが分かる。さらに驚いたのは、その周りで食べ物を作って売っていたり、子どもたちが遊んでいたことだ。これらが衛生的に食べ物や子どもに悪い影響を及ぼすのは明らかだ。特に子供たちは、どれほど汚いものかを把握せずに間違つて口に入れてしまつたり、ゴミを触つた手でそのままご飯を食べてしまうなどによって、下痢など病気にかかつてしまうことがあり、大変危険である。

三つ目に、清潔で安全な水へのアクセスが不十分であることが挙げられる。人々の中には湿地や湖などから水を汲み取り、生活している人もいる。安全で清潔な水へのアクセスが難しく、汚い水を得るしかない。そんな中、そのような水を直接飲んでしまう人もおり、それによって腸チフスなどの病気を引き起こす問題がある。



www.testifynews.com/2015/01/30/trapped-in-ugandas-water-poverty-cycle/ (写真)

最後に、ポイ捨ての問題だ。ウガンダに来てから困つたことの一つに、道端や大学内、建物内にゴミ箱が見当たらないことだつた。外出中に飲み終わったペットボトルや食べ終わったお菓子の袋などを捨てようと思つた時にどこにもゴミ箱が見当たらず困つたことがよくあつた。私はどうしようもなくそのままリュックサックの中に放り込んでいたが、現地の人たちは普段外出中に出たゴミをどうしているのか、いつも気になっていた。また、現地の人によると KCCA (カンパラ首都圏庁) という機関が特定の場所に設置されているゴミ箱のゴミ回収を行っているが、たくさん場所に回っていくのに時間がかかり、週に一回しか回収できていないという。確かに私がムバララ病院に訪問した際、病院の柵の外に大きなゴミ箱があつた。それが下の写真である。しかし、ゴミ箱はゴミでいっぱいになり、ゴミ箱から溢れ出ている。またそのゴミ箱の周りにはゴミが広がっていた。私はこれらの状況が、人々が簡単にゴミをポイ捨てしてしまう原因を作ってしまうのではないかと感じた。ゴミが広がっていると、そこにまたゴミを捨てても何も変わらないし、だれも気にしないと思つてしまうだろう。



これらの四つの問題からそれぞれの解決策を考えた。政府はスラム街を中心に公共トイレを整備する、たくさんのメディアを通して人々に湿地や湖などから得た水を直接飲まない、飲む前に一度沸騰させることを伝える、学校や村に衛生教育を広める、KCCA は週に一度以上のゴミ収集を行う、といった解決策を考えた。しかし、提案するのは簡単だが実際のところ、行動に移すのはなかなか難しいことは私にもわかる。これらの解決策にはお金が沢山かかり、政府の負担が大きい。しかしながら、これらの問題をより多くの人々に知ってもらい、深刻な問題であることを認識してもらうために政府の関わりは必要である。まずは政府が一番にアプローチしていくことが重要となってくる。そのため、私は上記で述べた解決策よりも低コストな方法を考えた。まずは、公共のゴミ箱を設置することだ。公共の場所にゴミ箱を設置することで、特定の場所にゴミが集まり、悪臭が道全体に広がるということは少なくなるはずだ。また、よく道端のゴミを拾っている清掃員のような人を見たが、ゴミ箱を設置しておけば、そういう人がゴミ収集の方へ回れるのではないかと考えた。それに、ゴミ箱があれば子どもたちがゴミに触ってしまうということも減るだろう。もう一つの提案は、JICA などの国際機関と協力した衛生教育を村や学校へ普及することである。ウガンダ政府だけではなく、他国の国際機関が介入することで政府だけの負担が和らぎ、新しい知識や衛生活動が見込める。これらの方法は他の解決方法よりも低コストで、政府だけの負担にはなりにくいのではないかと考えた。以上の内容が、私がマケレレ大学で行ったプレゼンテーションについてである。

5. プレゼンテーションを通して

私がプレゼンテーションを作成するにあたって、たくさんの訪問先で衛生面について意識して見ていた。その中で、ある訪問先の敷地内で見た光景が忘れられない。横の写真は敷地内で見た光景である。おそらく廃棄エリアであると思われるが、小さく3つほど見える黒っぽい箱がゴミ箱がある。しかし、あたり一面にゴミが捨てられており、適切な廃棄処理が行われていないのが分かる。驚くことに、ここは衛生的な物資を製造している工場であり、その工場の敷地内であった。この光景は、私にとってとても衝撃的なものであった。プレゼンテーションを通して、ウガンダでの衛生面について多く知ることが出来た。JICA などでは主に農業や交通整備における活動が中心で、衛生面での活動はあまり目立っていなかった。それはアプローチ方法の難しさや人数調整の困難さなど、実施していく困難さが他よりも大きいことが原因だろう。しかしながら、日本からウガンダに来てみて、私にとって一番ショックだったのは衛生面の悪さだった。環境の違いとはいえ、人々の意識ですぐにでも改善できる場所はたくさんあると思う。ポイ捨てしない、ゴミを子どもが触ることのない特定の場所に集める、そういう単純な部分が普段の生活では一番大切であり、衛生教育などの取り組みで人々に認識してもらうことが必要であると感じた。プレゼンテーションでは解決策として、主に政府や機関がまずは衛生面での活動の取り組みを実施していくことを提案したが、実際行わなければならないのは、そこに住み、生活する人々であり、彼らが衛生について認識し、注意していかないと何も変わらない。きれいな場所で安全に暮らすためには、人々の衛生への高い意識が必要である。

6. ウガンダに行って学んだもの・得たもの

私はこのプログラムでたくさんのことを経験した。地域の雰囲気も現地のご飯も何もかもが日本とは全然違い、毎日が新しい発見であった。ウガンダのご飯は初め、ジャガイモばかりで味にインパクトがなくて、たくさん食べることが出来なかった。マトケやポシヨなどは不思議な味すぎて、お皿に盛られた時は食トレをしている気分だった。また、ご飯の時は必ずハエが近くに来て、ずっとハエがご飯に寄ってこないように神経を集中させながら食べていた。他にも、ご飯を外で食べる時は厨房を見ないように気を付けていた。もし厨房を見てしまえば、目の前のご飯を食べる勇気は持てないだろう。ウガンダでの生活は日本にいる時には想像できなかったことばかりで、驚きの数々で圧倒された。しかし、ウガンダに来て気づいたことがある。私には、「郷に入

れば郷に従え」という言葉がすごくしっくりきて、現地での適応力が意外にも高かった。今まで先進国にしか行ったことがなかった私には、発展途上国と呼ばれる国は未知の世界で、そこで生活するなど考えられないことだった。しかしウガンダに着いてから、蚊が大量にいる部屋もダニがいるのが目に見えるベッドも悪臭のする道も大抵詰まるトイレも何もかも、日本とは違う国と思えば、すべて平気だったし、受け入れることが出来た。これは私にとってすごく自信になった。これから先、どんなに日本と違う国であろうとも私はその国で生きていけるんじゃないかと思えるほどの自信を持てた。私の所属している学部が地域学部ということもあり、地域それぞれがもつ文化や生活への理解や受容は人よりもあると自負していたが、自分が適応できるかは分からなかったので自分にとっていい発見になった。また、ウガンダという国について知れたことは、日本で生活する上で私の価値観を広げるものとなった。私が普段テレビやネットで見ると海外は、日本と文化は違えど生活環境は似ている国ばかりで、メディアで取り上げられる国も日本と大差ない国ばかりであった。しかし、ウガンダへ行ったことで、私が今まで当たり前前に生きていた環境は国が変わるだけでこんなにも違うことで、通用しないこともたくさんあるんだと認識した。私が今まで知っていた外国はほんの一部の偏ったものだったことを思い知った。これからいろいろなことを判断していく中で、私がウガンダで経験したすべてのことが自分の中の判断基準にこれからは蓄積されていくと思うととても貴重で豊かな経験だと思えて嬉しい。

また、ウガンダに来てからいい面だけではなく、ウガンダが抱える問題もたくさん認識した。それらの問題に対してどう取り組んでいけばいいか、マケレレ大学で受けた色々な分野の授業やたくさん行った訪問先で考える機会が多くあった。その多くの機会は私にとって大切なことだった。今までの自分はその問題点があるという事実を知るということだけで満足していて、そこから先どうその問題に取り組んでいくかなど考えたこともなかったし、考えようとも思わなかった。それはおそらく、気づいている人も認識している人もたくさんいるから私が考えなくても大丈夫だろうという気持ちが無意識にあったのだろう。ましてや、他国の抱える問題なんて私ができることもないし、知ったところでどうしようもないと思っていた。日本の授業でも、自分でどう取り組んでいくかと考えることは少ないし、意見を求められることもそうそうない。しかし、マケレレ大学の授業でウガンダが抱える問題を知った時、TAに「あなたならどうする？」と聞かれ、授業の先生にも「あなたの考えを教えて」「なんでもいいから考えを言ってみて」と半ば無理やり考えさせられた。私は慣れないその時間がすごく嫌いだった。しかし、「ウガンダはこうだけど、日本はどうか？」と聞かれていくうちに、彼らはウガンダ人ではなく日本人の私たちから見た答えを求めているんだと思った。その時に、違うところで生きてきた人たちから見たものの考え方はすごく重要なことなんでしょうかと思えた。自分が問題にどう取り組んでいくか考えることの必要性と考えを発信することの重要性に気づくことが出来た。

たくさん新しい発見がある一方で、自分の知識の乏しさと物事への関心のなさが私を苦しめたことが多々あった。このプログラム終盤にケネディ・セカンダリー・スクールを訪問した際に、特に私はそれらを痛感した。子どもたちと交流する機会が多くあって、話す機会もたくさんあったのだが、子どもたちからの質問攻撃がすごかった。その中でも、小学生から「あなたの国のリーダーは誰？」「どんな人なの？」と聞かれたときは驚いた。私が小学生の時は毎日給食のことくらいしか考えていなかったもので、まさか小学生の口からそんな質問が出るとは思わなかった。その他にも、「日本の中であなたが誇りに思うものはなに？」「日本の学校の仕組みは？」などたくさん質問をされた。正直、すごく戸惑った。すぐに思い浮かばなかったからだ。子どもたちに質問されたことのほとんどが自分でも知らないことで、何て答えればいいのか分からなかった。「私にも分からない」と答えたときに子どもたちから不思議そうな顔をされたことは忘れられない。子どもたちからすれば、どうして自分の国のことがわからないのかと思うだろう。本当にその通りだと思う。自分が今まで生きてきた国のはずなのに、日本はどのような国かということをもっと説明できない。日本にいるからこそここまで考えることもなかったが、日本から海外へ出たときに自分の国について説明できないのはすごく恥ずかしいことだと感じた。大学生の私とは正

反対に、ウガンダの子どもたちは自分たちの国についてとてもよく知っていた。植物の種類や農業のこと、学校のことやウガンダで有名なものなどいろいろなことを教えてくれた。彼女たちと私の差は物事への関心だと思った。私は昔から外国に興味があって、その分野に関心を持っていた一方で、国内には興味がなく、日本自体にあまり関心がなかった。日本にいる時はそれで何の問題もなかったが、海外へ行くとそれがすごく大きな問題だった。ウガンダでのいくつかの訪問先やTAと話している時もそうだった。何かしら質問するよう言われた時も、「恥ずかしがらずにどうぞ」と周りに言われるが、恥ずかしがっているのではない。何の関心もなかった分野だから全く質問が思いつかないのだ。自分の考えを言うよう言われた時も、その分野に対して全く知識がないため、答えられるどころか考えるまでもいかなかった。それが自分の中ですごくもどかしかった。自分が何に対しても全く関心がないことがこんなにもどかしく思えたのは初めてだった。それに対して、私たちをいつも助けてくれたTAたちは、どんな分野の授業でどんな質問をしてもすぐに答えることが出来ていたし、考えを言うことが出来ていた。彼らがマケレレ大学の在學生と卒業生というエリート集団だからというのも一つの理由としてあるかもしれないが、そこまで歳が変わらない自分と、ましてや海外へ勉強しに来ている自分と比べてこんなにも差があることへの悔しさと恥ずかしさを感じた。自分にいろんな面への関心がないからこそ、知識を得る機会を失い、考えを発信することができないことが、このプログラムでよくわかった。そして、いろいろな分野に関心がないことがどれほど、自分にとってマイナスポイントに繋がっているのかということを感じた。海外に興味があるから、海外に目を向けていればいいというわけではない。外国を知るためには、まずは自分の国について知ることが必要であることに気づいた。他国を知るためには自国を知らないと、対等なレベルでコミュニケーションを取れない上に、お互いがお互いを適切に理解する妨げになってしまう。私に質問してきてくれた子どもたちは、きっと日本に興味があって、日本を知ろうと思って質問してきてくれたのに、それにきちんと答えられなかったことが悔しいし、申し訳ない。様々な分野に興味を持って、自分から知る努力をしていけなかつたと思う。外国へ行くなら尚更、自分がその国では日本人代表となることを自覚しなかつたと思う。それをウガンダの人々に教えてもらった。

7. 自分の課題・次へのステップ

ウガンダで経験したことはこれから日本で生活し、勉強していくことを考える上で影響されることばかりであった。上記で述べたように、様々な分野に関心を持って、知識をつけていくことの重要性にも気づくことができた。その他にも、英語力の向上が自分には必要だと考えている。外国人と英語で話すことへの抵抗はないのだが、根本的に語彙力がないことが自分の課題である。日本語では細かく説明できることでも、英語では難しい単語は分からないから、極力シンプルな言い回しにしてしまうことが多かった。おおまかな言いたいことを伝えられても、細かいニュアンスまでは伝えることが出来ないことへのもどかしさをたくさん感じた。リスニングは比較的、単語と単語をつなぎ合わせながら理解することは出来ていたが、専門用語やあまり日常生活では使わない単語が出てくると全く理解できず、話についていけないことも多々あった。今後、語彙力とそれを使う応用力、実践力を付けることが自分の課題である。

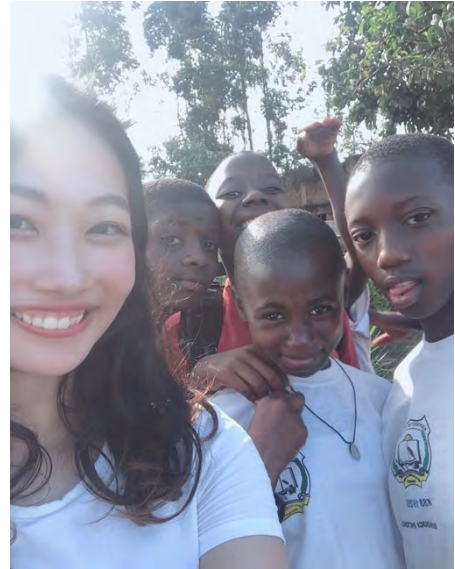
さらに、自分の課題が見つかったとともに、自分の将来やりたいことが少し見えてきた。今までは自分のやりたいことがあまり定まっておらず、何も見えない将来像だったが、今回のプログラムを通して、海外で仕事をしてみたいと思うようになった。特にアフリカを中心に子どもとたくさん関わり合えるような仕事に就きたい。そのために、英語力のスキルアップはもちろんのこと、今は日本についての知識をたくさんつけて、海外に発信していけるような人材になりたい。

8. 最後に

今回のウガンダ海外実践教育プログラムに参加して、今までで一番濃い時間を過ごすことが出来た。楽しいことばかりではなく、悔しいことも経験したが、今回のプログラムで自分に足りな

いものや必要な力が明らかになった。私にとって、これから自分がどうしていきべきなのか、どうしたいのか考える上で大切な材料となり、重要な経験となった。ウガンダという日本とは大きく異なる国へ行ったこと、知れたことはなかなかみんなが経験できることではない。ウガンダという国をよく知っている人も少ないだろう。私がウガンダだけではなく、アフリカを含めて発展途上国の魅力をどんどん発信していける人になりたい。

また、このプログラムでは一緒に行ったメンバーにも恵まれていた。意見や考えをすぐに言える人やリーダーシップがあって、みんなをまとめてくれる人など、お互いがお互いを高め合え、刺激し合える関係だった。学年的には私がメンバーの中では一番上だったが、みんなから教わることが多く、助けられることもしょっちゅうあった。ただ外国へ行ったことが学べたことではなく、一緒に行ったメンバーから学べるところが多くあり、目標としたいと思える人が多くいたことが幸運だった。このプログラムで、何一つとして自分にマイナスになる部分はなかった。多くの人に、ウガンダを知ってもらい、学んでもらい、自分の中にどんどん吸収してってもらいたい。私はこのプログラムを通して、たくさん新しいことを吸収したし、それを使えるように努力しようと思う向上心も生まれた。本当にウガンダに行ってよかったと心の底から思える、海外実践教育プログラムだった。



ウガンダ研修を経て

農学部生命環境農学科2年
荒木 佑哉

目次

1. ウガンダに来て感じたこと
2. 訪問先での発見と学び
3. プレゼンテーションの内容
4. 最後に

今回、私は約一ヶ月間ウガンダに大学の研修プログラムとして滞在した。これは私にとって初めてのアフリカであり、また初めての留学であったため、とても刺激があり充実した留学となった。初めに、ウガンダに来て感じたこと、訪問先での発見、学びを写真と共に説明した後、最終プレゼンテーションの内容を紹介し、最後にこの研修を通じて思ったことを書こうと思う。

3. ウガンダに来て感じたこと

まずウガンダに着く前に私はアフリカ、ウガンダのことについて全く無知であったため、どのようなところなのかわからず、一ヶ月の間うまくやっつけられるのかとても不安であった。しかし、いざ空港に着いてみると、とても親切でノリのいいTAさんたちが迎えてくれてとても安心した。そこからバスに乗りカンバラに移動するのだが、まずウガンダの暑さに汗が止まらなかった。それと、車とバイクの多さに驚いた。とても恥ずかしいことだが、私はアフリカにここまで車とバイクがあるとは思っておらず、もっと少ないものだと思っていた。さらに道路もアスファルトでないと思っていた。そのため、カンバラに着いて街を見て、すごい量の車とバイク、また渋滞を見てとても驚いた。それと同時に、なぜ日本より人口が少ないのにここまで渋滞が起きるのだろうか、と少し疑問に思った。ウガンダに来る前に渋滞のことを少しインターネットで調べたが、私は渋滞の原因は信号機や道路整備の不良だけではないとこの時思った。

その原因の一つがボダボダ（バイクタクシー）である。ウガンダの生活に欠かせない交通手段の一つであるボダボダだが、あまりに数が多すぎると私は思った。また、ボダボダの運転手の運転マナーは基本的に良くない。これはボダボダだけではなく、車の運転手もそうである。しかし、ボダボダは信号や渋滞で車が止まっているとその車の間をすり抜け、前に行こうとする。そうすることで、車の行く手を拒んでいると私は思った。

また、ウガンダの街を見ていて衝撃だったのがごみの多さである。特にカンバラではいたる所に大量のごみが放置されており、バスの窓を開けていると臭うところもあった。ごみ箱を設置しているところもあったが、それでもごみ箱はいっぱいになり、ごみ箱の周りにごみがたくさん落



写真1. バスの中から見た渋滞の様子



写真2. カンバラ市内のボダボダの様子



写真3. マケレレ大学内に
放置されたごみ

ちていた。これに私は、政府がごみを回収する人を雇い、その集めたごみでなにか他の製品を作ったりしてリサイクルすれば、処理するごみの量も減り、人を雇うことで雇用枠が増え若者の就職口の一つにもなる。さらに、街中のごみの量も減らすことができるため、一石三鳥になる。なので、このようなやり方をしてみてはどうだろうかと思った。

もう一つ衝撃だったのが、経済格差である。日本に住んでいて経済格差を感じることは少ない。しかしカンパラ市内を移動していると、ゴルフ場を目にした。さらに、ヴィクトリア湖のビーチにご飯を食べに行くと、高級住宅街が広がっていた。しかし、カンパラの街を見ると、あまりきれいとは言えない服を着て裸足で生活している人や、道端で寝ている人を見かけた。私達が泊まったホテルの前にもそのような人たちがいた。私は同じ市内でしかもそこまで離れていない距離でここまでの経済格差を感じることは今までになかったため、とても衝撃的であった。

2. 訪問先での発見と学び

ウガンダに滞在している間にたくさんの機関、施設を訪問した。初めに訪問したのは JICA である。そこではウガンダのインフラ整備など、日本からウガンダにどのような支援をしているかなどについての講義を聞いた。この講義を聞いて、日本は様々な形でウガンダの発展に協力していることが分かった。しかし、私はウガンダに来るまで JICA のことについてよく知らず、何を行っているのかも知らなかった。これは私だけでなく、多くの日本人がウガンダ、JICA について知らないと思う。なので、JICA の活動をもっと日本人に知ってもらい、それと同時にウガンダについて知ってもらい興味を持ってもらおうと、もっと JICA の活動を大きくすることができるのではないかと思った。

次に訪問したところはマケレレ大学だ。そこでは、オープニングセレモニーをしたり、いくつかの授業を受けた。授業はウガンダの農業、経済、動物、歴史についてであった。授業を受けていると、ウガンダはアフリカの中でも環境に恵まれていることが分かった。農業を国民のほとんどが行っている理由も湖がある、雨が降る、土の栄養価が高いなど、アフリカの中でも農業をする環境に適していることが分かった。

次に訪問したのが NaCRRRI である。そこでは、ネリカ米の生産方法や、開発までの過程など、主にネリカ米についての講義を聞いた。ネリカ米を生産するために、生産量を増やすためにたくさんの努力をされており、とても感動した。実際にネリカ米を栽培をしているところに行くと、他の品種との違いが分かるように、他の品種も一緒に栽培されていた。また、そこで実際にネリカ米の苗を植えたり、収穫したネリカ米の籾取りを行った。

次は Clinic Master を訪問した。そこではウガンダの患者のカルテを紙ではなく、パソコンで一括管理をしていた。そうすることで、二回目以降の受信時の手間と時間を減らすことができ、これを他の病院とも合同で行うことで、違う病院に行っても同じデータを得ることができる。私はこのシステムに強く共感し、とてもいいシステムだと思った。しかし、一つ不安なのはもしそのシステムがなんらかのエラーやウイルスによって機能しなくな



写真4. ネリカ米の苗を植える様子

ったときにどうするかである。もしそのような状況になった時に機能しなければ、また紙媒体で一からやらなくてはならないため、とても手間と時間がかかってしまうからである。もし、このような事態でも機能するシステムであれば、これはとても画期的なシステムになると思った。

次は、EcoSmart という女性の生理用ナプキンを製造しているところに訪問した。この EcoSmart はナプキンを本来は廃棄されるサトウキビの捨てる所や、トイレトペーパーの切れ端から作っており、また製造過程でもコストを削減するようにされており、こうすることで材料費、製造費を削減することができる。また原価を安く作ることができるので、販売価格も安くすることができ、お金のない子供でも購入することができる。ウガンダでは女の子が生理用品を十分に買うことができないために学校に行くことができないという問題があり、多くの女の子がこの問題を抱えていることを知り、少し衝撃的であった。なぜなら、もちろん私は生理を経験したことがないし、それがどれほど大変なものなのかも本当の意味では理解していない。さらに、それにどれくらいのお金がかかるのかも知らないし、日本ではみんな学校に来ている。そのため、その生理が原因で学校に行けなくなるということは、私にとって考えもしないことだった。この EcoSmart がしていることは、ウガンダだけでなく世界の発展途上国、貧困者を救うとても大きな活動だと感じた。

次に、ムバララ病院を訪問した。この病院では院内の見学のほかにエボラ患者が発生した時の対応や、その患者を隔離する施設も見せてもらった。正直私は、ウガンダにはまだエボラ患者がいるものと思っていた。しかし、看護師の説明を聞いていると近年ではほとんどエボラ患者が発生していないと聞いて安心した。しかし、院内を見学していると、やはりまだ衛生面に問題があると感じた。それはトイレや、診察室を見た時に感じた。トイレと診察室はあまり清掃がされておらず、また入院患者のベッドの間隔も非常に狭かった。これらは、感染症の二次感染をおこす原因になるので、これらを解決する必要があると思った。

次に訪問したのは国立公園である。三時間ボートに乗って川を遊覧した。その川では、カバ、キリン、バッファロー、ワニなどを見ることができた。その後、滝のすぐそばまで行き、滝の迫力を実感した。次の日には、バスに乗って国立公園内を周りキリン、象、鹿、サルなど様々な野生動物を見ることができた。しかし、私が最も見たかったライオンは見ることができなかった。

このようにこの滞在期間中にウガンダという国について、またそこからたくさんのお話を学ぶことができた。



写真 5. (左) 国立公園で見られたカバ

写真 6. (右) Murchison Falls

3. プレゼンテーションの内容

一通りウガンダで行ったことを説明したところで、ここからは私が行った最終プレゼンテーションについて紹介していこうと思う。私が行ったプレゼンテーションの内容は「ウガンダの渋滞」についてだ。では、なぜこのテーマにしたかという、私は車の整備工場アルバイトをしており車やバイクに興味があり、そのことからウガンダの車やバイクがどのようなものなのか見てみたかった。そのため、街を走っている車やバイクを見てみると、ほとんどの車が日本車であった。しかし、よく見るとタイヤをつける方向が間違っていたり、サイズの違うタイヤをはいている車をよく見かけた。さらにはスタッドレスタイヤをはいている車もいた。これらを見た時に、渋滞が起きているのは単に信号機や排水設備がないからだけではないと感じたからである。さらに、

一つ疑問に思ったことがある。それは「ウガンダ人はこの渋滞についてどのように思っているのか」である。日本では、あまり日常的に渋滞するという事はない。そのため、渋滞が起きる原因は、年末やゴールデンウィークなどの特定の期間によるものか、事故によるものが多い。しかし、ウガンダでは雨が降っただけでも渋滞が起こる。つまり日常的に渋滞を見ているわけである。そこで、ウガンダ人はこの渋滞を「仕方がないもの」として捉えているのか、それとも「改善すべき問題」と思っているのか気になった。なので、TAの中で、私と一番仲の良い William にこのことについて質問した。すると、「これは問題である。」という答えが返ってきた。そこでさらに何を改善すれば渋滞がなくなると思うか聞いてみた。すると、ウガンダは道路が少ないためみんなそこに集中するし、さらに道路が狭いから余計に渋滞をすると答えてくれた。私はこれを聞いたときに、確かにそれも渋滞の原因ではあると思ったが、それだけではないと思った。なぜなら、日本も道路は狭いからである。都会は片道三車線や四車線あるが、田舎はほとんどが二車線である。それでもあまり渋滞がないということは、道路が狭いことは渋滞の主な原因にはなっていないということである。しかし、道路が少ないことは確かに渋滞の原因であると思う。だが、道路を増やすにはたくさんの費用と時間が必要である。もちろん信号機や排水設備も必要だが、それも費用がかかる。さらに、ボダボダの数を減らすことも改善策の一つではあるが、ボダボダは国民の交通手段であり、また十分な教育を受けてこられなかった人たちの就職先でもあるため、そう簡単に減らすことはできない。そこで、私はウガンダに来て最も感じた渋滞の原因を改善するように提案しようと考えた。それは、車とボダボダの運転手のマナーの改善である。特にボダボダの運転マナーは良くない。初めにも言ったが、信号待ちなどで車が止まっているとその車の間を通り抜け、車の前に行く。しかもそのボダボダの数はとても多い。そうすることで、車が前に行けず、渋滞が起こる。さらに、信号機のない交差点では誰も道を譲ろうとしないため、右折や左折をするのに苦労する。日本では優先道路があり、また道路によっては道を譲ってあげないと渋滞が起きると分かり、道を譲ることもある。しかしウガンダではそういう事はない。基本的に自分優先で運転をしており、道を譲るということはない。なので私は、これを改善すると渋滞を無くすることができるのではないかと思った。そこで、私はプレゼンに以下のアウトラインを作成し、項目の順に説明を行った。

Outline

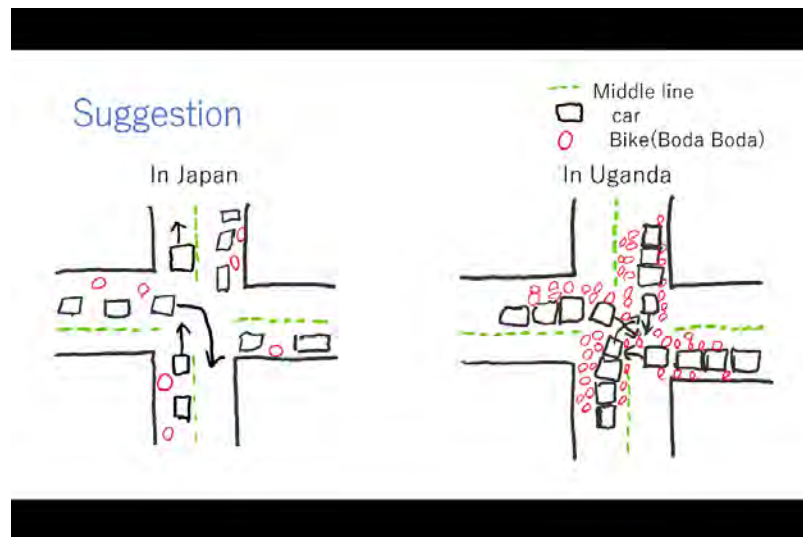
- The reason why I am interested in this theme
- Problems
- Causes
- Government has done to improve
- Suggestions
- Conclusion

私のプレゼンテーションのアウトライン

プレゼンの初めに、先ほど言ったなぜこのテーマに興味を持ったかを説明し、その次にこの渋滞がどのような問題を起しているかを説明した。その問題とは二つある。一つ目は、移動に時間がかかることによる、人々の労働時間の減少である。本来ならば、移動に十五分かかるところが、渋滞によって一時間や二時間かかることがある。そうすると、そのぶん会社や学校に着く時間が遅れる。そうすると、本来ならば一日で終わる仕事が二日かかることもある。そうして、渋滞が起こるたびに仕事がどんどん遅れて行き、会社の生産性が低下して、会社の売上げが減っ

たり、その人の給料が減ることもある。二つ目は、GDP が渋滞によって約 2.8 兆シリングも失われていることである。これは日本円にして約 84 億円であり、このことは渋滞によって毎年 84 億円も無駄にしていることを意味している。

次に、先ほど言ったような渋滞が起きる原因を説明した後、その改善策を説明した。その改善策とは、排水設備、信号機、Fly Over（立体交差）の設置や、もっと広い道路をつくることである。しかし、これらはどれもたくさんの費用がかかり、実践することは難しい。そこで、先ほど言ったような「譲り合う」ことを改善策として提案した。しかし、これを言葉で説明することは今の私の英語力ではとても難しい。そこで、以下のスライドを作成しこれを使って説明した。



日本とウガンダでの道路における車とバイクの状態

このスライドで伝えたかったことは、日本では車間距離を十分に取ること、道を他の車に譲るということの二つだ。ウガンダと日本で明確に違うことは車間距離だ。日本は事故が起こらないように車間距離を十分に取る。取っていないと、事故した時に自分が原因でなくても罰金が課せられる。また最近では距離を詰めすぎるとあおり運転とされてしまう。つまり、日本では十分に車間距離があるので、他の車に道を譲ることができる。しかし、ウガンダでは車間距離がとても近く、前の車のギリギリまで詰める。そうすると、他の車に道を譲ろうと思っても車間距離がないため譲ることができない。なので、私はウガンダでも日本のように車間距離を十分に取り、渋滞が起こらないように他の車に道を譲るという気持ちを持ってほしいこと、ボダボダの運転マナーの改善をこのスライドを使って提案した。すると、ある質問が返ってきた。それは、「日本では歩行者はどこを歩いているのか」である。日本は車道と歩道が分かれており、歩行者が車道を歩くことはない。しかし、たしかに言われてみればウガンダは車道と歩道は分かれているが、車道を歩いている人は少なくない。それもひとつの渋滞の原因なのかもしれない。なぜなら、ボダボダだけでなく歩行者もあたりまえのように車の間を歩いていくからである。それも車の行く手を妨げているため、ボダボダと同じである。

4. 最後に

最後に、私がこの研修を通じて感じたことは二つある。一つ目は勉強不足ということである。それは、英語だけではない。もちろん英語も勉強不足で、何度も英単語や文が分からないことがあった。しかし、私がそれ以上に感じたことは、私は日本人なのに日本について全く知らないということだ。大学や施設を見学した時に必ずと言っていいほどに聞かれることが、「日本はどのような？」である。大学で農業や歴史、経済を学んだ時にウガンダのことを説明された後、日本はど

うしているか聞かれるが、私は全然答えることができなかった。しかし、TA にウガンダのことについて聞くと、ほとんどなんでも答えてくれた。経済や農業、医療など、自分の専門分野以外のことも知っていた。

二つ目は、勉強意欲が低いことだ。施設を訪問した時に、必ず質問はないかと聞かれるが、その際に TA は必ずと言っていいほど質問する。さらに、必ず自分の意見を持っており、その考えも主張していた。しかし、私はあまり質問することはなかった。その度に、ウガンダ人の勉強意欲の高さを感じると同時に、自分の勉強意欲の低さと、日本の学習環境がいかに恵まれているかを痛感した。そしてここで一つ思ったことは、ウガンダ人の勉強意欲の高い訳は、勉強がいかに大切なことなのかを知っているからだということだ。私がウガンダに来て感じたことのひとつでもある経済格差を、彼らは幼いころから見ている。すなわち、勉強をするのとししないのでは、将来にどれほどの違いがあるのかを彼らは知っている。つまり、勉強をしてちゃんとした仕事に就いてお金を稼ぎたいという欲が、彼らにはある。しかし、私達日本人は幼いころから当たり前のように学校に行き、中学までは義務としてある。それから、高校、大学と進学するが、多くの人が勉強が好きではないと私は思う。実際、私は勉強が好きではない。それは、自分からするのではなく、やらされてきたからである。先生や親から、勉強しないといい仕事に就けないと言われてきたが、小学生や中学生の自分はその本質を理解することができなかった。それは、周りに教育を受けることができない人、またそのことによって仕事がない人を見てこなかったからである。さらに、日本にはたくさんの種類の仕事がある。なので、中学生の頃の自分に、仕事がない未来を想像することが難しかった。なので私は、日本人は自分の目で経済格差というものを見て、それが一体どういうものなのかを理解する必要があると思った。

また、自分自身の変化もこの研修で感じる事ができた。それは、自分の考えや意見をより言うようになったことだ。日本にいと、グループワークなどをしたとき、自分とは違う意見が出てきたときに、なかなか自分はそうではないと言い出しづらいことがある。しかし、ウガンダに来てからは自分の意見をちゃんと言うようになった。それは TA のおかげでもある。TA と話していると、TA は自分が正しいと思ったことは基本譲らない。もちろん、相手の意見も聞くが私はこう思うとはっきり言う。なので、私も自分の意見を言うようになった。しかし、あまり頑固になるのもいけないので、そこは気を付けたいと思う。

また、このプログラムに参加した理由はアフリカに行きたい、アフリカについて知りたい、自分のやりたいことを見つける、の三つであった。そして、このプログラムを通じてたくさんのことに興味を持てたし、自分のやりたいことも少し見つけた。それは、これからもっとたくさんの国に行き、そこの国について学ぶこと、さらには長期留学をすることである。今回このプログラムに参加して本当に良かった。私のように、特に将来やりたいことのない人や、大学生活がつまらないと思っている人には是非このプログラムに参加してもらいたい。必ずいい刺激になると思う。またウガンダに来て TA たちと再会できたらいいな。

ウガンダに行って

農学部生命環境農学科1年
楠本 ころこ

目次

1. ウガンダ海外実践教育プログラムに参加した動機
2. ウガンダに来るまでの心境
3. ウガンダでの経験
4. ウガンダの農家さんを見て感じたこと
5. プレゼンテーションの内容
6. 研修を通して学んだこと、自分の将来について考えたこと

1. ウガンダ海外実践教育プログラムに参加した動機

私がこのプログラムに参加した理由は、将来海外で働きたいと思っているので大学生のうちにいろいろな国に行って視野を広げたいと思ったからです。さらに農業の分野で仕事をしたいと思っているのでウガンダの農業にも興味がありました。このウガンダでの研修では多数の農業関連の訪問先があったので参加を決めました。これまで学校でたくさんの国の農業について学んできましたが、最近のアフリカの農業について授業で取り扱われることがあまりなく、今回実際に自分の目で見ることができるチャンスだと思い、参加しました。

2. ウガンダに来るまでの心境

今回の実践プログラムで、私は初めてアフリカに来ました。出発前は準備をしながら、こんなに少ない荷物で一か月弱持つのだろうか、足りないものはないか、いろいろと考えてしまって不安もありました。さらに、コロナウイルスの影響でウガンダまでたどり着くのか、プログラムもちゃんと実施されるのかと当日までひやひやしたものです。

3. ウガンダでの経験

ウガンダに着くと、まずそのまま飛行機から地上に降ろされたことに驚きました。外は熱気に包まれており、さらに晴れているはずなのになんだか快晴というには空が曇っていたことを覚えています。飛行機の中が涼しかったこともありとても暑くて、アフリカに来たのだな、と感じました。

初日はホテルに向かうだけでしたが、長時間の飛行機での移動でかなり疲れていました。初めてのご飯はホテルのレストランでしたが空腹感もなく、ただ大量のフライドポテトと戦った食事でした。



二日目の昼ご飯は韓国人がやっている中華料理屋に行きました。日本で食べる味に似ていてとてもおいしかったことを覚えています。ただ、餃子だけは見た目ものすごくおいしそうなのに、食べると何か香辛料が効いているのか食べられませんでした。それでもお腹いっぱい満足でした。TAさんの口にはあまり合わな

かったようで、そこで初めて文化の差を感じました。面白かったのは、お箸の練習を TA さんたちが楽しそうにしていたことです。私もフォークを使ってみたけど米粒が取れなくて結局お箸を使って食べました。

この日の夜は、全くお腹が空いていなかったのと、朝食に食べたパイナップルが日本で食べるものと比べ物にならないくらい甘かったので、パイナップルを頼みました。運ばれてきたものはなんと揚げられたパイナップルに、人工的なピンクのアイスクリームがのったものでした。まさか揚げられてくるとは思っていなかったのがっかりでした。それでも食べてみると元のパイナップルがいいのか、そこまで胃もたれもせず食べることができました。



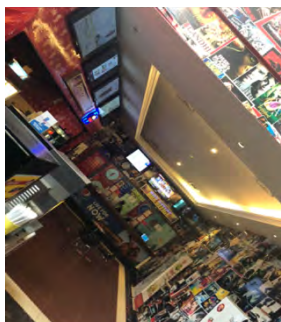
マケレレ大学に初めて行ったとき、まずホテルから学校までの道のりで道路を渡ることも何度かあり気の抜けない通学でした。学校もどこからがマケレレ大学の敷地なのかよくわからずに、一生懸命歩いて何とかたどり着きました。鳥取大学とは大きさが比べ物にならないくらい広くて、緑にあふれ、過ごしやすそうな学校だと思いました。ほとんどの木にたくさんの巨大な鳥の巣がつくられており、そこら中にマラブストが飛んでいました。日本で普段見る鳥はせいぜいカラスほどの大きさが当たり前なので、人間の子供より大きいくらいの鳥がたくさんいることは新鮮でした。

その日の昼食は大学の食堂で食べました。ここまでローカルなご飯を食べるのは初めてだったので、少し食べるのをためらってしまいました。でも食べてみるととてもおいしくて、なぜだか少し日本の味に似ているような気がしました。

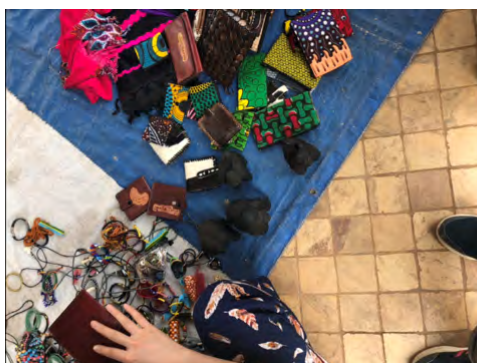


次の日はショッピングモールへ行きました。

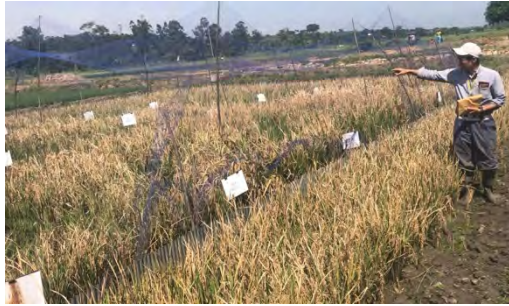
案の定セキュリティを通過してから中に入ると、それまでに行った場所の中で一番きれいでした。TA さんによく来るのかと聞いてみると、映画館があるからよく来ると言っていました。映画館に行くとポップコーンのいい香りに包まれていて、内装もポスターで壁が埋め尽くされておしゃれでした。



モールの屋上にクラフトショップがあり、そこでウガンダらしいワンピースと、祖母にエプロンを買いました。そのお店の店員さんはとても気さくな方で家族にお土産を買いたいと希望を言うと一緒に考えてくれて、たくさんの商品を出してきてくれました。そこでウガンダ人はコロナウイルスもお構いなしに話しかけてくれて、いい人たちだなと思いました。



ある程度慣れてきたころに、NaCCRI を訪問しました。ここではアフリカの米について研究している様子を見ることができ、とても勉強になりました。日本では栽培されない陸稲についての学習ができたことがいちばんの学びでした。レクチャーを受けた後にみんなで田植え、収穫、脱穀に行きました。機械を使わずにすべての作業をすることは大変だったけど、こうして少しずつでも稲作が広まってきていることを実際に体験できたことはいい経験になりました。



そのあと JICA ボランティアの服部さんに会いました。実際に農業の普及を農村の農家さんに行っている話を聞くと、日本との農業に関する考え方の違いや、コミュニケーションの取り方がどれほど難しいかということが少しわかったような気がします。米は良い商品作物になるけど育てるのが大変で、高く売れることがわかっていてもできれば米はやりたくない、現地の農家さんたちは言っていました。



4. ウガンダの農家さんを見て感じたこと

実際にウガンダの農業を体験し農家さんたちの話を聞いて、多くの過程の中で無駄になっている作物がたくさんあり、もったいないと思うことが何度もありました。街中では大きいトラックの荷台に大量のマトケが積まれていて、でこぼこの道を通るときに落ちてしまわないのか、下のほうにあるマトケはつぶれてしまわないのか、というようなことが考えられました。食料不足が問題になっている中で、このようなフードロスはとてももったいないことだと強く感じました。

5. プレゼンテーションの内容

最終のプレゼンテーションでは、流通の中でのフードロスをなくしていくことの有用性について発表しました。せっかく収穫した作物を少しでも無駄にせずに食べられることができれば、食糧不足の解決にも役立つと思います。

プレゼンテーションを作るときも TA さんたちにはたくさん手伝ってもらいました。初めて英語で個人のプレゼンテーションを作るのも、原稿を考えるのも、発表するのも大変だったけど、これからの課題も見つかりとてもいい経験になりました。



6. 研修を通して学んだこと、自分の将来について考えたこと

今回の研修は三週間だったので、実際にボランティア活動や社会貢献をすることがなかったので、今回訪問した協力隊の方のように、地域の活性化やその土地の地域問題の解決に自分の得意な分野でできる機会を探そうと思います。一緒に研修に行った子の中にも、もう動き出している人がいてとても刺激をもらいました。今回ウガンダに行って、自分の将来についてこれまでの人生の中で一番具体的に考えた時間でした。それまではただ海外で働きたいと漠然に思っただけだったけれど、実際に自分にできることは何か、また人が求めていることを実現させるために、私は何を学ばなければいけないか、具体的にイメージができたので、今回考えたことを忘れずに大学生活を精一杯過ごしていきます。またさらに、今回ウガンダに行って国立公園などへの観光もたくさんする機会があり、もっといろいろなアフリカの国に行ってみたいと思いました。次に行くときは、もっと長い期間にしてより良い農業がアフリカでできるような案を持っていこうと考えています。



ウガンダ海外実践教育プログラムから得た経験と学び

農学部生命環境農学科 1 年

和田 純奈



目次

1. ウガンダ海外実践養育プログラムに参加しようと思ったきっかけ
2. ウガンダに行く前のイメージと実際に見たウガンダ
3. 学んだこと
4. プレゼンテーションについて
5. 最後に

1. ウガンダ海外実践養育プログラムに参加しようと思ったきっかけ

私がこのプログラムに参加したのは、アフリカのことがよくわからないから、自分の目で見てみたいと思ったからだ。そもそも私にとってウガンダという国名は、地理の授業で必死に頭に叩き込んだだけの全くなじみがないもので、ただアフリカの国の一つという認識しかなかった。そしてアフリカは私にとってあまりにも未知の場所だった。学校の授業でアフリカについて学び、テレビなどでアフリカの映像を見ても、自分がいる環境と異なりすぎて想像するのが難しく、現実味がない存在のように感じていた。そのため、アフリカの貧困や格差などの問題に対しても「どこまで本当なのだろう？」と疑う気持ちがあり、国際協力や寄付の話を知るとどこか冷めた気持ちになってしまうことが多くあった。さすがにこのままでは良くないと思い、まずはアフリカの現状を自分の目で見ることから始めようとのプログラムに参加した。

2. ウガンダに行く前のイメージと実際に見たウガンダ

ウガンダに行くにあたって私が最も心配だったのは食事と安全面についてだったので、そのことについて研修前に情報を集めた。

食事について調べて分かったのは、ウガンダではマトケ、米、芋、キャッサバ、メイズなどが主食として食されていること、お米はお祭りなどの特別なときに食べるものだということだ。お米が特別な時にしか食べられないものならば、ウガンダでの食事は、芋はともかくマトケやキャッサバなどの、食べたことのないものばかりが出てくるのではないかと心配になった。また、先

生からバナナばかり食べていたとか食事があまりおいしくないということを聞いたので、ますます心配になった。

治安について調べると、日本の外務省の海外安全ホームページでは国境付近を除くと治安レベル1であること、それは日本人の旅行者も多いフィリピンの首都マニラと同程度の治安レベルであり、東アフリカの中では比較的治安のよい国であることなどが記されていた。一方で、アメリカ政府のトラベルアドバイザリーでは、ウガンダ全土に「十分警戒してください」と設定されていたり、スリヤひったくりが頻発しているという記述があったりして、元々アフリカに対して治安が悪いというイメージを持っていたこともあり、危険な国だという印象の方が強く残った。

だが、実際にウガンダへ行けばこれらの心配は杞憂だったと分かった。確かに現地の人たちはローカルフードを主に食べているけれど、ホテルやマケレレ大学の食堂では毎日のようにお米を食べることができた。マトケやポシヨは一度食べてみたが口に合わなかったので、お米を食べることができて安心した。主食以外の料理もおいしいものがたくさんあり、特にパイナップルがおいしくて、毎朝たくさん食べてしまった。お肉は日本と違い、豚肉、牛肉、鳥肉だけでなくヤギのお肉も一般的に食べられていて、初めて食べたがおいしかった。また、マケレレ大学の講義で農業について学んだ際にウガンダでの食肉の生産を示した表を見たのだが、豚肉、牛肉、鳥肉の中では豚肉の生産量だけが極端に低かった。それが何故なのか聞いたところ、豚肉がおいしいから売らずに家族で食べているからとか、イスラム教の人にばれないようにこっそり食べているからという回答をもらった。日本ではこっそり食べているからデータに残らないということはほとんどないことだと思うので、お肉一つとってもこんなに国の特色が出るのかと驚いた。治安の面では、銃を携帯している警官を見かけたときや、こちらを鋭いまなざしでじっと見つめてくる集団がいたとき、物乞いをされたという日本人学生の話聞いたときなどは怖いと感じ、警戒しなくてはと思うこともあった。しかし、バスから手を振ると笑顔で振り返してくれる人がたくさんいたり、ケネディセカンダリースクールに見学に行った時には興味津々でたくさん話しかけてくれたり、「You're coronavirus!」と揶揄してきた人たちも、笑顔で「Hello!」と言えば笑顔で手を振ってくれたり、ウガンダの人たちの親しみやすさやおおらかさを感じるが多々あった。スラム街や国境付近に近づかず、海外に渡航する上では当然の安全管理さえしていれば十分に観光できる国だと感じた。

また、発展途上国という言葉から思い浮かべていた様子よりも、実際はずっと発展していて驚いた。道はどこもコンクリートで舗装されておらず土がむき出しになっていると思っていたが、主要な道路はきれいに舗装されていた。首都のカンパラにはビルが立ち並び、大きいショッピングモールもあった。ホテルで Wi-Fi が使えて、部屋も予想よりきれいだった。

一方で、貧困や格差といった問題はバスで移動している際に窓から外を眺めれば、そこそこに見られた。都市から離れて JICA の圃場に向かった際に、手足はガリガリに細いのにお腹だけがポッコリと出ている子供を多く見かけた。そしてそれは日本の大学で栄養についての講義を受けたときに知った、クワシオルコルという栄養失調の症状と一致していた。講義でこの症状は発展途上国の子供に多く見られると聞いていたが、当時は「ふーん、そんなのがあるんだ」程度に聞き流して、現実には起こっている問題だと受け止めていなかった。だから、実際に自分の目で見て現



実にある問題なのだと思ったときは大きなショックを受けた。水を運んでいる小さい子供や、数少ない野菜を細々と売っているやせた女性を見かけることも度々あり、発展途上国の抱える問題や国際協力に対する意識が変わった。



3. 学んだこと

このプログラムを通して様々なことを学ぶことができた。ここではその中で最も印象に残ったことについて述べる。

一つ目はウガンダの GDP についてである。マケレレ大学の講義では歴史や農業、経済のことなどについて学んだが、最も印象に残ったのは GDP の話だった。日本の GDP が約 4.872 兆ドルであるのに対し、ウガンダの GDP は約 258.9 億ドルであった。日本とウガンダの一人当たりの GDP を比べると、一人の日本人の GDP はウガンダ人およそ 70 人分の GDP に相当し、あまりの差に驚いた。バイトをたくさんしている日本人学生の一か月分の給料とマケレレ大学の教員の一か月分の給料では、日本人学生の給料のほうが高くなってしまふほどで、しっかりした知識を付け、ウガンダ一の大学であるマケレレ大学の教員という職に就いたにもかかわらずこういう状況になっていることに不平等さを感じた。また、貧しい地域の人たちは一日当たりおよそ 7000 シリング（約 210 円）以下の収入で生活していると知った。ホテルの食堂で毎食約 20000 シリング（約 600 円）を使っていたので、その生活の厳しさが分かった。しかし講師の先生が、日本の GDP の一部をウガンダに譲ってくればウガンダは豊かになる、というような発言をした時には、日本人はそこまで豊かではないと反論したくなった。日本は一人当たりの GDP は確かに高いけれどその分物価も高いし、教育費の高さも少子化を迎えているにもかかわらず変化していない。さらに金融庁のレポートによると、欧米主要国と比べると日本の高齢者の所得はかなり低く、年金水準は OECD の平均をやや下回る。貯蓄なしで老後を迎えている人は約 25 パーセントにも上り、人生百年時代と言われる日本では老後のためにかなりの金額のお金を貯めなければならない。ウガンダの人が苦勞しているのは理解したが、日本人は日本人で大変なのだ、というようなことをその時は考えていた。しかし、プログラムを終えて日本に帰ってみれば、その考えは変わった。今まで普通だと思っていた実家がとても大きくきれいに見え、周囲も高級住宅街のように感じられた。道路がどこを走っても凸凹していないことに感動し、道を高齢者が歩いていることに違和感を覚えた。ウガンダでは草ぶき屋根の小さい家や整備があまりされていない雑多な景色が多く、道路は整備されているところもあるが、遊園地のアトラクションか何かかと思うほどに凸凹しているところもある。そしてウガンダは平均寿命が低いので、基本街で見かけるのは子供か働き盛りの若者ばかりだった。きちんと整備された環境が当たり前であり、憲法で健康で文化的な最低限度の生活が保障され、老人になるまで生きることができる時点で日本は豊かなのかもしれないと感じた。

二つ目はウガンダでの稲作の現状についてである。JICA のお米の圃場を見学し、現地の農家の方に話を聞くことができた。現在ウガンダでは米の需要が伸びており、政府の要請から JICA が支援して生産量が伸びているものの、消費量の方が大きく伸びているため輸入が増加している。コメは需要が常にあるため価格が変動しにくく、作れば作るだけ売れるという状態である。長期間の保存が可能で売りたいときに売れるというメリットもある。こんなにも条件がいい作物にもかかわらず、何故もっと多くの農家がコメの栽培をしないのかと疑問に思っていたが、ここではそれを知ることができた。コメは芋やキャッサバと比べると土を丁寧に耕さなければならない。芋やキャッサバなら問題なく育てられるような土でも、米を育てる場合はその土をさらに数回耕さ

なければならず、等間隔で植える必要もある。他の作物に比べるとコメは手間がかかるため、今まで育ててきた作物と同じように育てれば大丈夫だろうとコメの栽培に手を出して失敗することが多いそうだ。JICAの農業普及員が農業の指導を行っているものの、普及員の数が少なく、普及員の指導力も不足している。統計データが不足しているために農家の正確な状況が把握できておらず、普及員の活動管理システムや評価システムが不十分という問題もある。そこでJICAは普及員とともに教えを受けた農家にも技術普及を担ってもらったり、情報収集用のアプリを作ったりして工夫を重ねている。多くの農家がコメの栽培ができるようになれば、農家は収入を上げることができ、国は貴重な外貨をコメに割かなくてよくなるので、JICAの活動はとてもウガンダのためになっているのだと誇らしく感じた。



三つ目は交通についてである。カンパラの交通状況を初めて見たときはあまりの無秩序さに驚いた。交通量が多いうえ、運転マナーが悪く反対車線にも突っ込んでいく。歩行者が車と車の間を通り抜けながら物売り、大量のボダボダ（バイクタクシー）が行きかう。道を譲ったりタイミングを見計らったりしてはいつまでも前に進めなさそうなすさまじい状態だった。滞在先のホテルからマケレレ大学までの道中で交通渋滞によりバスが進まず、結局歩いて向かったこともあった。車の交通量が多い要因の一つとして、移動手段が車に限られていることが挙げられると考える。ウガンダの鉄道は貨物列車の利用が主で、人の移動手段にはあまり用いられていない。日本では都市部の移動には車ではなく鉄道を利用することが多いので、車の交通量が抑えられている。車の進行が滞る要因としては道路の舗装が不完全なことや運転マナーの悪さが挙げられる。JICAは交通渋滞を緩和させるためにカンパラ首都圏庁（KCCA）に対する支援を行っており、交差点の改良や交通マナーの意識啓発を行っている。また、ジンジャにナイル川に架かる橋を建設するなど、ウガンダの交通に大きく貢献している。



最後に、海外旅行保険と情報収集の大切さである。私はこの研修中に風邪をひき、初めて海外の病院に行った。コロナウイルスが世界に大きな影響を与えている状況下だったため、熱が出始めたときはもしコロナウイルスにかかっていたらどうしようかと不安で、ウガンダで初の感染者になってしまうのではないかと、病院で隔離などになったら治療費がとても高くなるのではないかと考えていた。私は海外で体調を崩したことも物を壊したりすることも無かったので、海外旅行保険は必要なものだと分かっているお金がもったいないと感じていた。しかし今回のことで海外旅行保険の大切さが改めて分かった。そして熱が下がらずに病院へ行くことになった段階で、キャッシュレス・メディカル・サービスを受けられる病院について全く調べていなかったことに気づいた。今回の海外渡航は学校のプログラムで引率の先生がいて、私はただ先生について行くだけでよかったが、もし個人的な旅行でこのような状況になっていたらと思うとぞっとした。もちろん保険会社に連絡すれば病院の場所も教えてもらえるが、緊急の場合に備えて事前に知っておくことが大切だと感じた。

4. プレゼンテーションについて

私はこのプログラムを通してウガンダの良いところも悪いところも知り、日本人にもっとウガンダについて知ってもらいたいと思った。そこで、どうすれば日本人にウガンダのことを知ってもらえるか考え、そのことについてプレゼンテーションをした。目次の2で述べたとおり、私がウガンダに行くにあたって調べて分かったことと実際の様子はかなり違っていた。私がそのような思い違いをしたのは、私の情報収集能力が欠けているというのももちろんあるが、ウガンダの情報自体が少ないことも要因の一つだと考えた。そこで、ウガンダに住んでいる日本人に、ウガンダでの生活について紹介した動画をYouTubeに上げてもらうことを提案した。文字ではなく動画にすることで人に気軽に見てもらえるし、ウガンダ人がウガンダの紹介をするよりも、日本人視点の動画にすることで親しみを持ってもらいやすい。日本では自分の私生活を紹介するだけの動画に一定の人気があることも、この提案をした理由の一つである。

私は英語で台本を見ずにプレゼンテーションをしたのは今回が初めてで、絶対にそんなことでできない、忘れる、失敗すると思っていたが、やってみれば最後まで台本を見ることなく、観客のほうを向きながらプレゼンテーションを終えることができた。これから先も英語でプレゼンテーションを行う機会はあるだろうが、このことを思い出すことで自信をもって発表ができそうだと感じた。

みんなのプレゼンテーションからは自分では気づかなかった発見や、思いつかなかった問題の解決方法を見ることができた。障害やバリアフリーについての発表は、自分には全くない気づきだったので新たな視点を得ることができた。確かに日本では障害者でも仕事につくことができるし、色々な保障があるけれど、ウガンダでは障害を持っていると生きていくことも難しくなるだろう。それから、子供が家の農業を手伝はなければならず、学校に来られない日が多くなって退学してしまうという問題についての発表では、家の農業の手伝いを農業の実習授業の単位として認めるという方法を提案していて、納得させられた。

人のプレゼンテーションを聞くのがこんなに面白いと感じたのは初めてだった。それは自分もみんなも、ウガンダの課題という一つのテーマについて真剣に考え続けたからだと思う。意見交換が楽しいと分かった良い経験だった。

5. 最後に

この研修は大変なこともあったが、有意義で楽しく、充実した時間を過ごすことができた。

発展途上国の抱える問題や国際協力に対する意識を変えられたということは、私にとって大きな一歩だった。アフリカは私にとって遠くて未知の世界だったが、ウガンダを通して少し身近に感じられるようになり、国際協力の必要性をよく理解できた。ウガンダで見たこと、それを見たときに思ったことを忘れず、発展途上国の現状を正しく理解し、自分に何ができるのか考えてい

けるような人になるための努力をしていこうと思う。

それから、ウガンダでできた友人にもたくさんの刺激をもらった。私たち日本人学生と行動を共にし、サポートしてくれたマケレレ大学の TA の人たちは、自国のことについてよく勉強しており、急にウガンダの農業について説明してほしい、経済について説明してほしいといわれた時でもスラスラと分かりやすく教えてくれた。もし私がいきなり日本について説明してほしいと言われても、彼らのようにはできる自信は全くない。海外に目を向けることも大切だが、日本のこともしっかり勉強し、人に説明できるようにならなければいけないと感じた。また、彼らは何事に対しても自分の意見をしっかり持っていて、質問も積極的にする。海外では自ら発言をしていかないと自分の存在意義がなくなってしまうということを別の海外研修に行った時に学んだので、今回は以前よりも発言しようと努力した。前回よりはずっと発言できるようになっていて、自分の成長を感じられてうれしかったが、やはり常に自分の意見、発言を大切にして勉強している彼らにはまだまだ追いつけないと感じた。日本の講義の雰囲気ではなかなか難しい部分もあるが、それでもできる限り質問したり意見を言ったりして発言することを癖づけていこうと思う。それに加え、彼らは自分の将来を見据えて勉強をしている。私はやりたいこと、興味のあることははっきりしているものの、それをどのように仕事につなげていくかという部分があいまいなままである。そのため、自分に何が足りていないのか、何を重視して勉強していくべきなのかわからない。目標を持って勉強することの大切さを感じ、自分の将来を見つめなおすきっかけになった。それから、外に目を向けることで当たり前だと思っていた日本の良さを見つけることもできた。帰国した当初は当たりの景色、日常生活でも新鮮味を感じて、とても不思議な体験だった。

英語は適当な文法でも、思いついた単語を口に出すだけでもとりあえず話してみるようにしていた。すると、間違えても大丈夫だと恐れずに話せるようになった。研修中は聞き取りが全然上達しないと感じていたが、日本に帰ってくると、研修前より英語が聞き取りやすく感じるようになっていたと分かった。なんと伝えればいいのかわからずに諦めてしまったことやもどかしい思いをしたことも多かったので、そのとき話したかったこと、聞いてみたかったことを次はちゃんと伝えられるようになりたい。

たくさんの学びを得られた貴重な機会を作ってくくださった関係者の方々に感謝し、ウガンダに行くことで広げることができた視野、新たな発見、身についた力を無駄にしないように勉強を続けていこうと思う。



最後まで読んでいただきありがとうございました。